

1979

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
大正十四年七月一日發行(每月一回一日發行)

永樂町人編輯



七月號

【第七十七號】

サッポロビール
リボンシトロン





七月號目次

(大體原稿到着順に依る)

小 話	覆審法院 伊藤憲郎氏	京城つれづれ草	殖産銀行 守屋三葉氏
閑 え	東 拓 尾崎敬義氏	思ひ出	日出小學校 島田秀夫氏
端 午	日本醬油 市山盛雄氏	花虹に見入つて	今村 軞氏
書 籍	總督醫院 小林晴治郎氏	スツ裸の魂	南山本願寺 安藤顯隆氏
溫陽一浴記	石川久臣氏	路上所見	會叢所 大村友之丞氏
謠曲推奨	中島病院 中島貞信氏	蕃音器賣日の話	鐵道局 林原憲貞氏
義士外傳	古河興業 水谷九二吉氏	鮮人の二博士	總督醫院 棉引朝光氏
ふるさと	殖産銀行 中島 司氏	泣き戻り	朝鮮信託 桑野健治氏
空の香篋	東大門署 加藤好晴氏	雪の西伯利亞	實業家 廣江澤次郎氏
命 日	鑛南浦 川添種一郎氏	金剛山國立公園論	鐵道局 久保田得三氏
ヤンキーキャン	木 浦 吉村貫之氏	お答へ	朝鮮火災 河内山樂三氏
壺	京城師範 白神壽吉氏	あを葉	朝鮮銀行 岸 巖氏
大地に還る心	大阪朝日 井上 收氏	雜 想	永樂町人
死 刑 場	佛教慈濟會 小水眞二氏	雜 題	
東京にて	殖産銀行 深尾道恕氏	おぼえ帳	雜筆書屋主人
避難 民	林 業 内田竹三郎氏	江湖風聞錄	雜筆社 吉田 莊一
あすのお天氣	京城電氣 寺村虎重氏	無駄ばなし	雜筆社 平田 久雄
高麗嶺の話	富田商會 富田儀作氏	勝利の暮會	雜筆社 石川 利夫
堀内氏初老の會に 發起人を代表して	實業家 古城梅溪氏	山中一喝錄	雜筆社 平田 久雄
南 漢 山	專賣局 青木戒三氏	守屋さん	雜筆社 吉田 莊一
彌勒出生以前	京畿道廳 時實秋穗氏	一堂侯の書	雜筆社 石川 利夫
愛 硯 記	京城商議 工藤重雄氏	パコタ小宴	雜筆社 石川 利夫
宇宙我觀	總督府 駒田亥久雄氏	世間人間集	雜筆社 平田 久雄
椰子木立	總督府 市村 毅氏	雜 話	石川 其他
冗談から婆が出る	鍾路警察 森 六治氏	高橋先生	永樂町人
如水 社	寺尾組 寺尾猛三郎氏	編輯後記	雜筆同人
花ちゃん	朝鮮ホテル 伊藤 龍氏		

小 話

京城覆審法院

伊 藤 憲 郎

大正の今日、流石にこんな話はあるまいが似た話がある。

或るところの上役、お家傳來の古鏡を上蓋にして監獄で硯を作らした、思ひの外に美事に出来た、來る人毎に自慢をした、部下のBさん、武骨な癖に時々下手なお世辭をする。

上役『君！どうだ、よく出来たらう、見て呉れ給へ、こゝの監獄で作つて貰つたんだヨ、いゝだらう』

部下『ハム、左様ですか、拜見さして頂きませう、なる程』

上役『どうだ、君その通り一つ作らし給へ、直ぐ出来るよ』

部下『なるほど、蓋と硯とが中々よく合いますです、監獄製も此頃は決して馬鹿になりません、この上蓋の模様などはとても囚人に作れやうとは』

上役『エ？君！その蓋は……』
そのとき上役は開いた口がふさがらなかつたと云ふが、さて／＼官海に泳ぐものは、うっかりお追従など云へぬことである。

◆世間ばなし

平 田 久 雄

京城の名物男大垣丈夫翁、その自ら告白する所に依ると、あれで月足らずの早産兒で、生れて四五年の間、右にねぢれた首が、どうにも正面に向かなかつたといふ▲翁の健康法は、盛んに食鹽水を飲むことで、一日ぎつと一升くらゐ『だから髻は白くツても、肌は見てみ給へ、これの通り生娘のやうに、つや／＼して居る』と▲因に翁は元と醫學に志したもので、が、あまり持て過ぎて、へへへ』

一、樺 色

法廷は傍聴人で埋つた、萬縁叢中紅一點、金紗を纏ふた女が一人、女は呼ばれて前に出た。

裁判長『證人！其方の年齢は』

女 『二十四歳です』

裁判長『其方の職業は』

女……（白いお白粉の顔、パツと赤くなつた、眼パチクリ）

裁判長『エ？ハア、無職か』

女は救はれたやうに頷いた、女は○○樓の籠鳥であつた、ほんとうに法規の通り商賈を訊問したら裁判長はそれこそ化石の見本になる、なぜなら、其の女の顔は誰も見えて解る白粉焼けた樺色を呈して、満座の中では恥かしい職業婦人なのが一目解るのであつたらう。

二、非常線

或るところへ強盜の這入つた或る深夜○○町の交番の前を二人の男コソ／＼と通る、教習所を出した許りのA君こゝぞと許り飛び出して、男の兩方の袂を掴んだ。

男『なにやるか』

警『なにやるものか、貴様！、何處から來た、何を持つて居る！怪しい、來い、サア來い！』

男『馬鹿、離せ』

警『なに離せ？、這入れ、貴様、名前を言へ』

男『名前？、口では言へん、紙を出せ、書いてやる』

書かれた名前は○○法院檢事○○○○、A君すつかりしほれて、擧げた鐵腕のやり場なし、いたづら檢事は笑ひながらいや職務に忠實！お役目御苦勞／＼と交番を出た。

A君それから非常線の張番に腕がにぶると——無理もない話である。非常線の時には何人と雖も従順でなければならぬから。

三、監獄製

昔、或るところに馬鹿息子があつた。

おやぢ『コラ息子！、この床柱に節穴がある、これはほんとうに惜しい、これがなければほんとうに値打があるのだ』

むすこ『ハーン』

其後暫く經つて其息子或るところで立派な馬を見た、そこで馬の持主に向つて尻の穴を指して云ふことに、

むすこ『エ、あんだ、惜しいことだ、この馬のこゝんところにこの穴が明いてなかつたらほんとうに値打があつただに

悶 え

東 拓 尾 崎 敬 義

鎌倉や一人居るこそうれしけれ寂しさといふ純眞の境
 今日のことすべて忘れて夜となれば只歡樂の東の間もあれ
 春雪や俤を下りて人入りぬ扇ヶ谷の仇あける門
 ありし日の夢を見るかな櫻咲けば京の夜遊の袖ながき少女
 誰を見てもおろかと思ふ其日より吾が身ひとりに寂しさの薄く
 四十にして悶えの人となりぬ吾れ五十は近しなほ悶え居る
 四十度の熱にふしたるその時よふと死を思ひ「悶え」はとけぬ
 上加茂や青葉街道二十丁橋を渡れば朱の大鳥居（京都にて）
 嵯峨お室加茂へ廻りて東山青葉の中の京といふ町（同）
 歌麿の畫を見る如き京女初夏姦殊にうつくし（同）
 清水や青葉の中の觀世音參詣人に戀はなき世ぞ（同）

端 午

日本醬油會社 京 城 出 張 所 市 山 盛 雄

吾子の爲めたつる幟のうれしくて門に立ちみつふりあふぎつ
 みづからの學びたらざる嘆きは子に思ひつつ立つる幟は
 まづしけど財布の底をはたきても幟買ひたしと言へる妻かも
 たれかれが送りよこせし鯉のぼりいせいよろしく風をふくめり
 ひとごみに連れとほぐれて櫻花散る下かげにうつなきかも（夜櫻）
 色雷燈ぐるり廻りてま白なる盛りの櫻あざやけきかも（同）
 妻を子をつれて來つれば飲む酒も樂しくあるか夜櫻のもと（同）
 夜櫻をみるべく敷ける吳座の上ごろる酒に裾しどろなり（同）
 されごとの人の言葉に訓へられ寂しくなりて酔さめにけり（月尾嶋）
 潮くもる沖べはろかに帆をあげて風にさらふ船のみゆるも（同）
 子をのこしおのれひとりが汽車にのり立居せはしくあはてる親（同）

書 籍

總督府醫院研究室
理 學 博 士

小林 晴 治 郎

私は本を集める道樂を持つて居る。勿論私の専門上の書籍を集めて居るのである故、道樂とは云へぬ器であるが、集めてゐる中には次から次へと欲しい物が出来て、手に入ればそれが現今直に必要のない本でも非常に喜しく感ずる。

それ故多少道樂の域迄進んでゐるかも知と思ふ。そして十六七年間私の僅かの財政上の餘裕を以て世界の各地から集めた結果は、日本に多分一冊しかない、少くも數部以上ないもの、或は今一冊求めよふとしても、金の多寡に係らず困難と思はれるものが數十冊以上ある（實はそれ以上の數に上つて居ると已惚れてゐる）集めた本の中には千七百年代のものもあり、千八百五十年以前のものは可なり多いこんな古い本が何の用に立つかとば時々人にきかれる點であるが、私の専門とせる動物學の一部の種類は、世界で從來唯一度か又は二度しか見付けられないで居るものが少くない。是等を今朝鮮で更に發見し、之を研究して發表する上には、たとへそれが百年二百年の古代のものであるとも必ず前の著書を參考する必要がある。中には從來の記録を皆集めた、所謂一部のモノグラフが出来てゐるものもあるが、モノグラフは其著者が

それ迄の本を讀んで作つたもの故モノグラフの著者の意見が入つてゐるから時に誤もないではない（實例が少くない）されば兎に角關係の書籍は新舊にかかわらず蒐集する必要がある。

集める方法は近頃のもの過半其著者から直接に贈らる。之は専門仲間の交際故、こちらからも新しく書いた物は送る。私の如き極狭い専門の部分を修めてゐる者では、世界を通じての同じ専門家の數は多くはない故、現在のものを得るには餘り困難はない、しかし古い本で、著者が死んでから久しくなつたものは書籍店の手を経るの外はない。英佛米伊等各地に古本の書籍商があるが、矢張完備してゐるのは獨逸である、獨逸の二三の古本屋に注文すれば大抵のものを探し出してくれる。戦争後一時廉價（少くも日本人には）であつた獨逸の本（獨逸語の本といふ意味ではない）も現今は非常に高くなり我々貧書生には書籍蒐集は大負擔である。さて外國の本に比して最も集めるに困難を感じるの是我國の書籍である。余の専門は生物學と其應用の學問殊に醫學の一部に關係のものであるが、生物學の方面は比較的都合がよいが醫學方面の古本（教科書風のもの

【 四 】

を除いて）を得るには甚だ困難である。然し時によると殆んど無代價同様で手に入るのも日本の古本である。又日本では外國の本で時に非常に廉價なものがあつることがある。今京城で得た二三の例を述べる。一英書で『救』の本がある之は千九百二年の出版であるがその後改版されず、價は十圓以上のものである。之を京城の或古本屋で見付けた、價をきいたら五十錢であつた（値切れば尙まけたかも知れぬ）。又或雜誌の約十ヶ年分（原價は數十圓に上らふ）の價が反古紙より稍少し高價であつた（之は私の想像でなく其本屋の主婦が丁度古新聞の價だと云つた）持つて歸る際になつて重くて余の力に叶はず、車を雇つたら車代の方が本代より高くなつた。此雜誌は私の専門に近いものであつたが、殊に其専門の方面の私の一知人が探してゐた事を知つた故、其人にゆづつた。其時知人は私に幾何を拂はうかと云つた。私は書籍商でないから物質上の利益を受ける事は出来ぬ。然し無代價では受けた方で心苦しかるふと思ふので原價（即ち古新聞紙代）を知人から受けた。此雜誌は近い將來に當然古新聞紙と同じ運命になるのであつたであらふ。是が現今は専門家の手許にあつて其人の用に立つてゐるかと思ふ（ば誠に愉快である。尙余は京城で或る科學雜誌の明治二十年前發行のもの初號から數十部を手に入れた。是も余の専門に近いが少し違ふ。しかし明治二十年前のものは現今は稀であらふと思ひ、兎も角反古同様の價で買つて置いた。こんな例は尙あるが日本の本が集め難いのは多くは前の雜誌と同じ運命になつて消へてゐる

ためではなかるふか。

専門外の本文又は自分に興味のない本が、寄贈或は義務的購入で手に入る事が少くない。又昔は必要で手に入れたものが今は無用になつたと云ふ様な事も稀でない。是等が澤山溜るか、又は移轉の際等は便宜上古本屋の手に渡されるのは普通の順序である。此際等は等の本の中で一汎的でない物を古本屋に賣れば、上の事情から考へて見ると本屋は古新聞紙以上の値には受け取つてくれぬらしい。そして是等の本の多くの運命も亦た古新聞紙と同じであるらしい。しかも一方には非常に望んで得られないでゐる人もあるのである。甚だ惜しい氣がする。適當な仲介人(本屋)があつて、賣る人と買ふ人の間に立てば、賣る人買ふ人の利益のみでなく、仲介者も立派にやつて行けると思ふ。但し是は外國流に充分順序を立て、廣い本の庫を設け専門に従つて完全な目録を作り、以てゆつくり需要者を待たねばならぬ故、相應な資本は要する事と思ふ。

尙私は上に古い新聞紙を無價値の様に書いたが、之は一般人の古新聞紙の取扱方を云つたので、古き新聞も其道の人には貴重な參考資料であらう。又私は幼時讀んだ少年向きの雑誌を今讀んだら非常に興味深い事と思ふ事があるが是は困難らしい。現今古本屋の店頭にさらされてゐる汚れた少年雑誌も數十年後には其時の大人に惜まれる事がありそふに考へられる最後に私が目下求めて得られぬ一書をあげる。それは朝鮮醫學會雑誌第二號である。若し此文を讀まるとの方々の中で、此雑誌の御不要なのを所持の方があつたらば、

相當の代價でゆづつて頂けば誠に

難有く存じます。

溫陽一浴記

石川久臣

松本様——七年ぶりに來ました朝鮮新聞に居た私が、京南鐵道が出來るといふので天安から群山の對岸まで、根氣よく歩いた當時の追憶を恣にし乍ら溫陽に浸つてゐると、今更の如く月日の經つのは早いものだと感じられて來ます。

今も變りない同じ浴槽に身を沈めますと、矢張り此處の溫泉は低溫で、湯上りの氣持がよくありません。導かれた溫陽館の一室も、矢張り七年以前そのまゝです。

山陰生れの私が、今度の震災を斯うした溫泉の中で想像しますと何だか一層城崎邊りの慘狀がまぎ／＼と聯想されるやうです。しかし御安心下さい、私の郷里は震災地とは大分離れて居り、又親戚知己もありませんから——。

初夏といふよりも寧ろ眞夏に近い此處にはモウ蚊群が陰つてゐます。緑深い溫陽は溫泉のせいか氣温も京城より餘程高く、浴衣一枚の素肌で夜晝寐轉んでゐますと、流石に遊覽浴客の地か、なまじりかしい三味線の音が樹の間をとほして流れて來たりします。

それにしても此の溫泉地に不似

合なのは未だ電燈の設備がなく、薄暗い五分芯のランプの光の下で讀書してゐますと、ツクツク田舎らしい氣分がして參ります。しかし却つて何んだか斯う青い蚊帳の中から、古い昔形の大きい筈のついたランプを眺めると、云ひ知れぬ物さびた氣持になつて、わけもなく子供の時分の記憶が蘇り、京城などではとても味ふことの出來ぬ情景が身に迫つて來るやうな心持がいたします。

持病の痔疾もモウ大分快方に向ひました。遅くとも月末内には京城へ歸ります。(五、二七)

◆『真人』の話

吉田 莊 一

『真人』といふ短歌の雑誌は、京城で刊行せられる有らゆる印刷物の中、一とう垢ぬけのしたものと云つて宜い▲最初細井魚袋、市山盛雄兩氏で計畫したものだが、その後細井氏は内地に轉じ、責任一切市山氏にかゝつて居る▲だいで毎月注ぎたしが人らうし、編輯とてもラクではない▲それを醬油會社の支店長片手間で支へて居る市山氏の苦勞は、タイしたものだ

謠曲推獎

中島内科小兒科 中島 貞信

生存競争の激しい世の中に蓋處せんと欲するならば、随分腦味噌も絞らねばならぬであらうが、過激なる筋肉労働によつて身體の疲勞を來すと同様に、神經系統も餘り酷使すれば神經衰弱が起る事は當然である。故に趣味娯樂を求めて、心神の安養を謀ることが必要であらう。

娯樂といつても色々で、多少の利害得失は免れぬが、私は謠曲を推獎したいとおもふ。業務の餘暇に大聲を發して謡つて居る間は、自身が其の曲の主體なる人格に同化されて仕舞つて、煩雜なる俗事を忘れる事が出来る。大きな聲を出すには自然に深呼吸も出來、呼吸器の操練にもなり、近頃流行の腹式呼吸や靜座法にも叶ふ。若し夫れ御馳走が過ぎて腹が苦しいといつた場合に一番うなつたら御腹のすく事請合である。

謠曲には天神地祇に關するもの修羅物、靈物、狂女物、妖怪變化に關するもの等の種類があるから或は森嚴に、或は勇健に、或は優美に、或は幽玄に、或は剛壯に各々其の曲柄の意を體して謡ひ表はす事が肝要であり、其處に面白味も妙味も存する譯である。

千手の曲に『琴を枕にうたゝ寢の』云々、又班女の曲に『翠帳紅闌に枕ならぶる床の上』云々の文句がある。之が謠曲二百番中最も

艶つばい場面かとおもはれる、其の千手や班女曲を公衆の前で謡つても、謡ふ人も聴く人も一向野鄙に感ぜぬ事程左様に、前後の環境が美化されてゐる。誠に詩的であり、又超越的な文章である。

謠曲には十徳ありと云ひ、又十五の徳を擧ぐる人もある。大分こじつけの様ではあるが、行かすして戰場を知る。老ひずして老境を察し。戀せずして美人を憶ふ……等がそれである。

謠曲は一人でも樂めるし、多人數ならば猶更結構である。地謡の同吟では地頭を尊重して聲調を揃へ、一糸亂れず謡ひ行く時の愉快な事は何ともいへない感じのものである。又この娯樂は若い人にも適し、老境に入つても結構、寧ろ老人の滄い聲ならではの情味を表はせない様な曲もある。この趣味は家庭に容れて寧ろ兒女に良き感化を與ふるといはれてゐる。圍碁や將棋と違つて、謠曲には勝ち負けがない、従つて二二年も稽古すれば、誰れでも鞍馬天狗に倣つて奇妙に天狗になりたがるものである。何事にも至極謙遜な人が謠曲では中々謙遜の態度を支持して行く事が六ヶ敷い様である。つまり各方面の交際では裏面に利害關係を伴ふ場合があるけれどもこの娯樂の交際ではその心配がない爲め、打融け過ぎるからである

【六】

うとおもはるゝ。この點からいへば無邪氣な娯樂とも云へよう。謠曲の流儀に五流あることは誰れでも知つてゐる。いづれも各々別派を樹てゝゐる丈け、夫々特長があつて何流でも結構である。

兎角高尚の趣味として、又興味ある娯樂として謠曲を御獎めし度いとおもふ。然し謠曲は下手な文章の宣傳位では容易に稽古を思ひたつ人はあるまい、多くは健康上醫師の勧めに従つてとか友人の切なる勧誘に動かされてといつた様な場合に始める人が多い様であるこの頃は各流の家元が時勢の變化に促されて藝道の秘密を稽古本の上公開する様になつたので、従前より餘程樂に會得する事が出来る様になつてゐる。

自分は元來以ての外の謠曲嫌いであつたにも係らず、先輩の勧めに斷り兼ねて眞におつとめの積りで稽古を始めたのであるが、素より聲量もなし、極々の悪聲なれば上手になれぬことは萬々承知して居ながら、十餘年も稽古を續けてゐる。則ち興味を感ずればこそである。自ら興味ある娯樂と信ずる故に、人に獎めて悪くはないとおもふ。敢て諸賢に謠曲を推獎する

巷説聽取帖

石川 利夫

會議所の大村書記長曰く、私は二三年前、鑛業會の徳野氏と一所に金剛山に行きましたが、あのヒヨロ／＼の徳野氏の健脚なことを、私は勿論、案内者もすつかりヘコタレ、こんな先生は開山以來たつた一人あつた切りだと舌を巻いて居ました、同氏と山登りは決してするものぢやありません、桑原々々

句がある。之が謡曲二百番中最も
い爲め、打解け過ぎるからである

るものぢやありません。桑原々々

義士外傳

小山田と萱野

古河鑛業會社 水谷九二吉

五衛門の家に立寄り、留守を幸ひに衣類金子を盗んで何れへか走つたのである。横川勘平が十二月十一日彌左衛門に與へた書狀にも、小山田庄左衛門、此者は十一月二日小袖金子少々盗み取り脱落と書いてある。
盗人美化して戀の勝利者となる地下の庄左衛門之を聞いて『娑婆の人は思ひやりがあらア、俺に女まで付けて逃がして呉れるヨ』ト云つたかドウカ。

京 城 雜 筆

○ 今月こそはト云ひながら雜筆社に約を果さぬこと最早これで三回義理にも義理にも此上逃げられない、と御念してサテ感筆を執つて見たもの、本職の經濟論を振廻すは花見る人の長刀にも比して野暮の骨頂、かと申して持論の國字改良や米食和服の改善を本誌で述べ立てる勇氣もなく、あれも不可、これも不可と迷ひ迷つた揚句最も當り障りのない傳説異聞を又々書き續けることにした。例によつて素人の史實研究、誤謬なければ幸ひ、あれば御示教願ひたし。

○ 元祿十五年霜月十五日の雪の曙赤穂義士四十七名が本所吉良の屋敷へ亂入し力戰奮闘して居る頃、此處は同じ江戸ながら芝神明風呂屋の一室にフト目を覺まし『南無三しまつたり』と叫んで床から跳

起きた一人の武士があつた。
何者？又何故に此狼狽？

これぞ同じ義盟に加つて居た赤穂浪士小山田庄左衛門其人であつて、明日は愈討入と云ふので前夜知人の許へ暇乞ひに廻つたが餘り寒いのでツイ暖まらうと風呂屋へ

揚つたのが抑々大事を誤る其、綺麗な湯女と盃を交して居る内終に大醉を極めて前後不覺となり、覺めた時はもう既に遅い。ウム残念と地團駄踏んで悔んだが今更仕方がない、此上は腹一文字に掻き切つて亡君への御詫ひ同土への申譯と双肌脱いで刀を抜いた時『まあお待ち遊ばせ』と後から湯女の柔い手が掛る脂粉の香がアんと來る考へて見れば此處で死ぬのは詰らない、君と寝ようか千石取らうかままよ千石だ、名譽が何？仇討が何？可愛い女と楽しく暮すが勝と心機一轉女と手を取つて甲州へ逃亡したと云ふ。

以上が世間一般に説かれて居る小山田庄左衛門の物語である、芝居にすれば音羽屋畑に向きそうなものの兎に角近來大流行の戀愛至上主義の好モデルと云ふべしだ。

○ サテ戀愛至上主義者には氣の毒だが此物語は根もない葉もない作り事で、事實を申すと彼庄左衛門は生來不信な男であつて討入の日が近づくに従ひ憶病風に誘はれ一日同士の合宿から老父を見舞つて來ると稱して南八丁恒濃町片岡源

○ 赤穂義士から脱落した者に尙一人早野勘平事本名菅野三平がある此男も芝居では山崎街道で猪と人間とを取違へて打殺した上其財布を搔拂つて來たので大問題となり養母から散々油を絞られ檢死役からは盜泉の水を飲む飲まぬと極め付けられるから、矢張り實説に於いても小山田氏の盜癖があつたかト云ふに全くさる悪黨でもない彼に就ては色々説があるが、お家斷絶の後大石等の義盟に加はつたことを父母兄弟にも洩らさなかつた所、子の心親知らずで其父なる人、豫て恩顧を受けて居る有馬侯に彼が仕官を勝手に約束して仕舞つた、彼は義盟を打明けられずサリとて有馬侯に仕へずば父を見殺しにすることとなり、忠と孝との板挟み、遂に自害し打果てた、と云ふのが最も事實らしい。

序のことに芝居でお輕勘平と諱はれ彼の戀女房の如く思われ居るお輕の素性を調べて見ると、これは父京都の米屋の娘であつて大石が山科閑居の折其妻になつたと云ふ事で、勿論彼と縁も由縁もない之が彼の女房となり女郎となり、果ては大石に身請けされたりしては、彼女も迷惑、萱野も大迷惑。

故 郷

殖産銀行調査役 中 島 司

郷里の友人から貰つた手紙の一節に、くには今蠶豆のたぐさかりだとあつた。

私の故郷は福岡縣、筑後河が將に有明海へ注ぎ出やうとする邊、大川町といふ所である。取り立てゝ擧げるほどの名所も名物もない所である。附近の風景がよいかと云へば、それは寧ろ平凡である。筑水の上流には山光水色の秀でた所もあるが、私の郷里近くの下流では、たゞ河身が廣く水量が多いといふだけで、朝夕の關係で水も濁澄を缺き、兩岸は泥渚で蘆荻一面に生ひ茂つてゐる。附近一面坦々たる平野で、田圃遠く連なり、林泉の美は何處にも求むべくもない。けれども、私にはそれでも懐かしくてたまらない故郷である。『斯様な平凡な所ですが、一たび春となりますれば、菜花麥浪の間を、風帆悠々として河を下り、野に立てば菜花の香りに惱殺されずには居れませぬ。中學時代には、先生の『静思録』を懐にして、長堤を歩み、上り下る船に對して演説の稽古を致したものであります。』

まことに、平々凡々たる筑後河畔の我が故郷も、春から初夏にかけては、今日の私の脳裡に詩境となつて浮き出して来る。それほど私には水國の情趣が深き印象となつて居る。永らく他郷に在る私は時に觸れ、折に觸れて郷里を思ふ、故郷の春を思ふ。しかもその懐郷の情たるや、必ずしも現在の故郷が戀しいといふのではない、過ぎ去つた我が少年時代の生活の背景たりし故郷を懐かしむのである。

最も直截に言へば、筑後河畔の春は、菜花の春である。河畔一帯の平野の春色は、櫻でもなく桃でもなく、一に菜の花によつて代表されて居るのである。一望十里江岸の平野は、春となれば菜花に非ずんば麥浪、麥綠に非ずんば菜黄にて彩られる。その平野を貫ぬいて筑後河の水が風帆を浮べて悠々と海に朝して居る。河岸の長堤には帯紅紫色の蓮華草が一面に咲いて居る。堤上と云はず、田の畦と云はず、此の花で一ぱいだ。

春と菜花と蓮華草の外に私の郷里で異彩を放つものは蠶豆である。くには夏豆と呼ぶ。白い花に黒い斑があつて、美しい花でもなく、葉と云つても風情があるでもない。けれども此蠶豆が私には忘れられないつかしいものである。春さきになると蠶豆の葉が段々大きくなつて行く。その葉の一つをちぎつてその先きを指で揉み揉まれた所を舌の先きと上顎で吸ふやうにすると、葉の外皮が空気を孕んで一ぱいに膨れる。それを兩手の手のひらでパチンと破裂させる。少年の折にはこんなことを樂しみに一日を豆畑の中で遊び暮らしたものだ。それから麥畑の追憶も私には深い。麥の穂が伸びる、その穂を摘んで引くと管のやうな莖が抜けて来る。それを手頃に摘み切つて先きをつぶして吹くと麥笛になつてピーピーと鳴る。春はあちらでもこちらでも、麥笛の音が聞える。空には朗らかな雲雀の歌、地には無心の兒童が吹き鳴らす麥笛の音。これを自然の合奏と云はずして何であらう。

菜種畑の中に立てば子供の頭が花に隠れてしまふ。麥畑や豆畑をかぎんで歩けば姿が隠れる。私の少年時代には茫々漫漫たる畑の中でよく隠れん坊をしたものだ。あたまも著ものも菜種の花粉で黄ろくしたものだ。

小學校を卒業すると私は家から一里半東に距つた柳河(獨立花藩の城下)の町にある傳習館といふ中學校に通ふこととなり、毎日一里半の路を往復した。菜花の香を浴びて通ふこと五たびの春を重ねた。中學時代に私が最も崇拜したのは徳富蘇峯先生であつた。私は先生の『吉田松蔭』や『新日本の青年』や『静思録』や『天然と人』その他あらゆる著作を誦讀したものである。春風嫋々たる筑水の畔、菜花の芳香を浴びつゝ先生の書を懐中して長堤に立ち、會心の文章を朗誦し、或は水邊の草

空の香奠

東大門警察署長 加藤好晴

むらに仰臥し、天上の雲雀に對して先生の名句を口ずさんだのであつた。
中學を出て東京に學び、その間夏休みには大抵歸省し、冬休みには偶まには歸つた事もあるが、春を故郷で送つたことは殆どない。學窓から社會に飛び出し、東京で職に就き、轉じて京城に來り、更

に東京に移り、再び京城の人となつた。しかも未だ曾て菜花の春に歸つたことはない。晩春初夏の水國に歸つたことがない。併しながら今日の私が、郷里を訪うたとしても、果して二十年三十年前の少壯時代のやうな純眞な氣もちで、故郷の風物に對することができらであらうか、否か。

之れなら誰でも出来る慈想だが眞逆に此主義で空を出した譯でないだけに可笑しい。
僕も不思議き出した、眞面目に告げても興がないから、二つ茶目つて遣るふと思つて、狂歌(?)を書き和田君の前に差し出した、其文句は恂ふである。
和田されし包の中やから錦
本來空に鼎おるとは
夢にも失策した事を知らぬ同氏は、何處迄も濟ました顔で、又例の狂歌位と思つて讀み出すと共に顔を眞赤にした、酔つた色より一際強く……。

僕はアハハ、と笑ふ、同君も引摺られて、てれ氣味の交つた笑方をする。
頭を掻き、其の話す處によると、電話で戻つた事を聞き、急いで申問すべく會計係に香奠包を拵らへ、中に參圓入るゝ椽輦んだ、會計係は聞き違へたものか包だけ拵へた、頼んだ本人は無論中に金が入れてあると思つて調べもせず持つて來て、飛んだ恥をかいたと云ひつゝ、荆妻より包紙を取り戻し中味を入れて改めて佛前に供へた、之が所謂會稽の恥とでも云ふのか……。

頃日森鐵路君の紹介で京城雜筆社の石川君が僕の事務室に見へられ、肩の凝らぬものを何が書けと云ふ。僕は恥かしい事だが、京城に來て最早十ヶ月になるが始めて聞く社名だ、同君が携へて居た雜誌を瞥見して非常に面白く感じ、快諾して筆を取る事にした。

大正八年四月八日のお釋迦様の日に、僕の母は老養病で天壽を終つた。長男であり戸主である僕は歸省して葬儀を済まし千葉縣松戸町の官舎に戻つたのは同月二十一日頃だ。

確か其翌日頃と思ふ、隣接の船橋警察署長和田君は早速見舞に來て呉れた、同君が其れ迄になるには僕が先輩として相當引き立てた特別の間柄である。

恭しく黒水引を掛けた香奠は申詞と共に僕の面前に出された、禮を述べた僕の手より妻の手に、更にそれが佛前に捧げられる迄は頗る無難だつた。

數里を隔つた處から態々來て呉れた厚意もあるし、又別懇の間柄でもあるから夫婦して歡待した、酒が相當に利いた頃、茶の間の方で荆妻が『良人一寸』と呼ぶ。

席を外して妻の處に行くと、香奠包の前に置いて笑ひ轉けて居る何をしたと尋ねたら、之を御覧なさいと指さす、云はるゝ儘に手に取つて見ると『御佛前へ和田』と書いて在つて別に變つても居らぬ様だ、尤も中途は氣が付かない。

妻の説明では遠路の干係上直ぐ香奠返しをする考へで其振合を見る爲め佛壇から包を下して中を調べた處、入れ忘れたか包紙だけだ云ふのも變だし、云はぬのも變だどふ仕様との相談。

無論同氏は忘れたものだ……が併し志があればなくても夫れで禪山の道理だ、顯本法華宗の宗祖は慈悲に就て恂んな歌を詠んだ。門に立ち物乞ふ人の聲聞けば
哀れと思へ施さずとも

◆卓上小話録

吉田 莊一

鮮展の人氣作家三戸萬歳君が、今年に當に這入らなかつた▲そこで氏の最負筋で、いろいろ物議を起して居るが、それは面白くない▲勝敗は兵家の常ぢや、賞に入ることもあらう、漏れることもあらうそれは相手(審査員)のこのみ次第だからね……くやむことは二つもない……言ふな〜。

命日

鎮南浦 川添種一郎

ところが昨秋またも命日が増した、妻を亡くしたからである。月三度の命日はなんだか會食のあまりに繁くなつたような氣持がし、
 會食團樂も命日本來の悲哀を感ずる事もあつた、心すゝまめ日は會食を省きたいと思つたが命日を亡くする事はできなかつた。しかし此春外父の嗣子は嫁を迎へた、吾が一門にも一陽來福のときが來た。

四

新夫妻は一家を構へ、外父の命日は同家に移つた。月三回の命日の一日は新家庭に集ふ事となり、吾が命日は再び二度に減つた。
 三度の集ひの數は變らねど場所かはり、而も新家庭の幸福に誘ひ寄せられて喜びを分つ。

五

この様にして命日は又々數年前の會食團樂の行事となり、睦みの集ひとなつた。亡き外父も、實父も、妻も皆此集ひを享け迎へてほゝ笑み満足して居てくれるであらうと想ふ。

大正八年までは自分の一家は久しく葬祭の憂き事にもめぐりあはで誠に幸福であつた。九年の春突然外父の永眠に會して悲みを感じ境遇上に著しい變化起り、渡鮮の因縁も生じ、佛事を營む機會も起つた。翌十年には實父逝きて、神仕への悲歎にも遭ひ、毎月二回の命日を迎へる事となつた。

二

兩家の母……幼弟妹は何れも東京に在り、兩家の壯丁者のみ此地に移住して事業にいそしみ居るが、自分始め皆々若き者共とて悲みも仕事にかまけて、元氣に紛れて親共の命日も忘れさうになる、母共が側に居てくれれば流石に忘れる心遣

三

ひはなきものを、自分はそれを懸念して父親の月兩回の命日には特に馳走して縁者會食することにした。内地なれば彼岸、さては祥月命日には祭事迎僧の奉仕は常の事であるが、在鮮の若き同胞の會食は奉仕といふよりは會食團樂の集ひである、老ひたるかたぐるしき人がゐたなら或は不謹慎なりとたしなめるかも知れぬ兩父共生前家族の集合を非常に喜び、外父は大食を以て有名なりし人、實父は一本の手晩酌を樂みとした人であつたから、其命日にも洋食、支那料理、すき焼と随分祭事に不似合な馳走振りで賑かた、さすがに忘れ勝の命日も互に記憶し合ひて缺くことはなかつた。

ヤンツキーヤン

木浦 吉村貫之

私の郷里に寧神王と云ふ神様がある、毎歲舊曆八月朔から十一日までの長い祭典で、武内宿禰を祀つたもので、傳説には宿禰が暴行天皇より五朝に歴事して、仁徳帝の朝に骸骨を乞ふたところが、天皇は然らば一年の内十一日だけ昇殿せよとの優詔があつた、ところが三百幾歳の老人の事で耳が遠いから十一日の暇を賜はると承つて如今毎歲十一日休んだのが祭典の日數になつて居ると云ふのであるさて此の神様は御百姓の神様と云ふ事で、遠近より老若男女が集つて十一日間の賑ひであるので諸方から興行師が集つていろいろな見世物を出す、それについて思ひ出すのがヤンツキーヤンである。

ので、或るものが一坪だけ地面をかしてくれと云ふ、イヅレはやし立てる事であらうから斷わると云ふたがなか／＼きかない、しかたなしに貸してやつた、すると早速籠圍ひの小屋をつくる、何を見せるかと思れば一匹の驢馬を引き込んだ、何にするかと思ふに別段のこともなく小屋の前にヤンツキーヤンと筆太に記し、サア入つしやい入つしやいこれはヤンツキーヤンと云ふ支那は安南の産物、珍らしい動物で御座いとはやし立てゝ居る。

馬に似て居るね」と云ひ、やがて『驢馬じゃ』と云ふ様になつて終に見る人もなくなつた。

しかし興行師は案外のもうけをして大いに禮を云ふて居る、その時『君それは驢馬じゃないか』と云へば『さうです二里ばかり下の方で買ったのです』と云ふ、なる程見覚えのある筈自分の宅に入する老人が時々乗つて来たものである『そんなものをよく見手があるね』といへば『何あに見世物など云ふ奴はこんなもので驢馬とわかつて四五日は大丈夫と思ひましたが案の通りです』と。

これは三十年も前にあつた話であるが餘程面白いと思ふたので今でも忘れない偽りだと知つてもそれを匿して人に知らさぬ、そこで次から次へと騙されていく、行き詰る所まで行く、その間に一人も眞實をあかすものが無い、それはアンドルセンの御伽噺で有名な霞の衣の様なもので東西同じ人情である事も亦面白い

さて雜筆讀者各位……現時の世相は最も多く此の話のやうではありませんまいか

壺

京城師範學校主事

白神壽吉

温室屋の軒を押し上げさうな大壺が、家の周囲に行列してゐる。此の壺の数が、その家の貧富をあらはすとさへ云ふ。

さて、春雨のそぼ降る日、此の壺の行列は、薬屋根を傳う雨滴と相合して、濡れた表面から、實に静かな色調を表しながら、落著きをその周邊に漂はせる。

秋の夜は、青空の星が一つ一つ此の壺に宿る、明月残えて、星影疎な頃には、壺は出来る限り水を湛えて、月を宿す。田毎の月は壺毎の月か。問ふ人もあれば、飛雁の行手も寫して、昔物語の蘇武がことも傳へるか。

此等の壺は、前に書いた通り富みの尺度である。

内地では、米麥は體に、漬物、味噌は桶に、と云つた工台で、容器は物に従つて各變へて用ひられてゐるが、一把一束、壺が朝鮮では使はれてゐる。

入れる物の量が多くて、壺の数は尠す。又、質が異つて、多様になつても壺は殖へる。

いづれにしても、壺の數と云ふことは、その裕かさ加減に關係するから尺度でなくてはならぬ。

壺が富を語る、更に又禿山をも語る。加へて、自然に順應してゐる生活形式の創造も語る。

西の山に木材は乏しい。桶も糧も樽も造れぬ。食料を貯へることは、事を缺がぬ、何か容器を要求する。容器を作る材料は無いものかと摸索した揚句、足もとに踏む土であることに氣附いた。そして大壺小壺が、家のまはりに行列し始めた。

今の朝鮮の人は、この様に生活歴史の壺を意識してゐるか、否かは知らぬが、壺はそう語つてゐる朝鮮の婦人が、井戸からの水汲み、今まで水を汲み入れたバカチを、水壺の上に浮けて、その水壺を頭の上のせる。ヨチヨチと歩き始めると、それに調子づいた、浮けたバカチはうかうか揺れる。やがて朝餉の煙が村に立つ。

内地で井戸水を桶に汲むことから、一日の暮が開くとすれば、朝鮮では水壺から一日の生活が始まる。

しかも、日常使用し、生活に缺ぐことの出来ぬこれらの壺には、唯單に便利に仕上つてゐる許りでは止め難い心の不満がある。

便利に役立ち、心持にもしつくり合ふものでなくてはならぬ希求をこれに表現して來なければならなかつた。

そこで、壺は朝鮮の人にとつて必需品である上に高貴な藝術品で

なくてはならぬ。實にも、朝鮮の壺には、生活が滲透してゐると共に時代民心の叫びさへも内聽される。

序に愛壺家佐藤功一博士の壺の鑑賞法を書き添へて、壺の多い朝鮮に居る人の爲めに送る。

「閑靜な部屋卓上に壺を置くそれも數多くては不可ない。唯一つに限る。そして、その一つの壺を靜な心で、じつと眺める此の場合光線が、重要な關係を持つ。正面光線で眺めるのが最も、感情を平凡にする。餘り強くない側面光線か又は裏光線がよい。

表面が滑かにテラ／＼した藥のかゝつてゐるものは、裏光線で見ると最もよい。其時壺の肩の所から胴の兩周縁にかけて、細くはつきりと明るく、其に挟まれた廣い中央部は一樣に淡暗い陰となつて、其の内に一點何かの反射の強く立つてゐる時など名狀しがたい美しさを、持つものである。如何なる表面を持つ壺も良い光線は二方光線である。勿論一方の窓を正面にして座し、その間に壺を置き、一方の窓を左右何れかに置き得る様な部屋でなければならぬ。此の場合左右兩側の内、窓の無い方に當る壺の胴は細く、強く輝いて、窓ある方の胴は廣く、柔かな光を浴びる。

そして、其の兩者の間の左程暗くもなく、又さして明るすぎると云ふ程でもなく、壺は全體として、最も丸味を帯びて見える次は位置であるが、餘り見上げる位置は、壺の口元が隠れて、それが壺であると云ふ事、即中空であると云ふ感じを失ひ、恰

持つ主位にあるものは線である。

曲線の美である、こと。

控 え 帳

雜 筆 書 屋 主 人

度窓のない建築を見るやうで面白くない。それかと云つて、餘り見下す位置は、壺の丸味を充分に現はす事は出来ても、肩の彫味が足元を隠すことになつて是もよくない。

最もよい位置は、丁度壺の口元が横に細い階圓に見えて、其の間から僅かに内部の隅を窺ひ得る程度の處である。壺は普通の飾床には不向である。日本座敷なら琵琶床に置くべきである。然し鑑賞する時には、前にも云つた通りに、閑静な部屋の卓上に於て、何れの方面からも見られる様にし、光線の最も良い場所に、椅子を置き、壺の一つを全ての物から絶縁して眺めるがよい。その時の距離が餘り遠くては不可ない。距離が遠いと、壺は部屋の内の他の物と相關聯して、単に一裝飾物となり勝てある。故に、一間以上を距てぬがよい。成る可くなら、身體を前に曲げて腕を延ばせば、手が壺の口邊に届き得る位置に、安樂椅子を置いて、椅子の背によりかゝりながら、靜かな心で、じつと壺を眺め入る。

其の折壺の意味ある形から喚起せられる美的情緒は、觀者すべてに現實から、引離して深い恍惚に誘ひ入れる。やがて、徐ろに身を起して、壺を手にかけてそれを膝の上に抱き上げる。其の膨脹の重みの感じから来る喜びは、眞に豊へ様のないものがある。云々

終りに、各時代に於ける朝鮮の壺について暗示的な數言を残して置きたいと思ふ。

壺の持つ形、色、線と云ふ三つの美的要素のうちで特に朝鮮壺の

この雑誌は、十人ばかりの特志家の、後援に依つて立つて居る。

中には、十圓、二十圓の廣告を毎月缺さずだまつて出してくれる方もあるし、亦全く、廣告も何も出さないで、單に維持費として、何一つ文句を言はないで、提供してくれる方もある。

京城雜筆の生ひたちの、そんな外なだらかに行つたのも、かうした後援者があるためである。

けれど、月末が来るたびに、私の心は、痛んでしやうがない。それは、だまつて、喜んで出して頂けるだけ、尙更ら氣がまつて、仕方がない。

一體、有價紙五百も出して居るんだから、あたり前なら、誌代を中軸として、立つて行かねばならぬ筈である。

ところか、困るのは、その誌代である。

流石に寄稿家は、快く拂つて頂けるが、その他の社會では、なかなかさうは行かぬ。

堂々たる某會社の支店とか、官吏でも勅任近くの人でも、なかなか手際よく拂つてはくれぬ。

喧嘩腰で……そして結局踏み倒されてしまふ。

中には、踏み倒すとわかつて居ても、さういふ有名商店、有名人物へ雑誌が行つて居ないことは一つの不得策と思つて、泣く泣く諷刺することもある。

こんなふうで、誌代といふものは、私のところでは、ちつともたよりにならぬ。

それなら新廣告で……といふ案もあるだらうが、それが亦、思ふやうに行かぬ。

京城では、廣告を出す店の數もきまつて居るし、その十軒か、十五軒へすべての新聞雑誌が押しかける。

その結果は、一雑誌への配分は知れて居る。

こんなふうで、誌代、廣告とつちから行つても、頗る心細い……だから矢ッ張り理解のある方へたより、心をいため、氣をつまらせ乍ら、依然として御迷惑をかける。

こんな罪な仕事はないとも考へる——出してくれる方に、無限に出させ、一方には、拂はぬものは依然としてタダ雑誌をやつて居るいはと味方いぢめである——不公平と知つて不公平を實行して居る。

明るい氣持になれる時がない。

大地に還る心

大阪朝日京城支局

井 上 収

【一四】

て、遺水その他の手入れをした、
が然し求め来たものよりも、土
より手しほにかけ育てたものに、
多くの感激のあるを感々感じた。
私は私の力で育て得ぬほどの、多
くの子を得つ、困るなら育て、や
るといふ篤志にも数々あふ、然し
一人も遣る子はない。大地より育
てあげた物の尊さの味得であらう
(一四、六、四)

◆雨傘を買ふ

吉田 莊

元の京日經濟部長の伊藤大輔君、
前垂がけに變つて、今は同社販賣
部長▲この間も一寸天氣の怪しい
日、その前を通ると『△△さん
〜と僕を呼び『まア私の店も
見て下さい』伊藤君丁寧に案内し
て、さて『この傘は内地直輸入、
町のものより二割安……丁度天氣
もヘンだから決してゴ遠慮なくお
もちなさい』グズ／＼してる中に
三圓ほど商賣されて了つた▲イヤ
伊藤君仲々偶におけぬワイ。

◆岸さん尊像

石川 利夫

鮮銀庶務の荒木さん、鮮歴に書を
出品して二つとも入選、流石にわ
るゝ氣持はしないらしい▲來年は
油繪ぢや〜と、胸を叩いてござ
る▲この人漫畫が最もうまい『君
一寸……』といつて、僕が衣服喫
つてるうちに、僕の像を描く▲何
でも近いうち岸さんの尊像を描い
て飯泉さんの贊を添へ、そしてそ
れをわが社に寄せらるゝさうな▲
今からお願ひ申しておく、どうか
その次ぎには飯泉さんを描いて、
岸さんの贊を……何分よろしく。

◇ 土に還れ、自然に還れ。

藝術も人生も、みな土に生れて
土に還る。麗しき自然の囁く時、
大地の微笑む時、人は皆唄ふであ
らう、微笑み讃へるであらう。

大地を踏まぬ生活は、みな虚偽
である、土の匂けぬ藝術は空虚で
ある。空虚ほど薄つべらなもの
はない、充實せぬ人生ほど寂寥な
ものは、ないであらう。人間が輕卒
に嘘言を言ひ、その後の淋しき、
心にもなく振舞つた後の苦しさ。
薫りの高い藝術の尊さ、氣品の優
れた人間生活、みなこれ土と自然
を、しかと抱きしめた爲である。

大地を離れ、土を踏まぬ、人生
行路の寂しさ。凍りて寒い嚴冬、
人は大地の温き懷を離れ、凄慘な
自然の情景に、親しまぬ冬籠りの
時を暗く暮すであらう。然し春光
の輝き、新緑の囁を聴く時、人も
自然もまた甦生の祝福に、人間の
尊さ、土の香の嬉しさを、泌々味
はふであらう。

◇ 土に還れ、自然に還れとは、ウ
オーズウオスや田詩園人達の、都
會文化を呪ふ、詩的表現では決し
てない。都會生活者が、避暑とい
ひ避暑と稱して、都會よりエスケ
ープを試みるのは、必しも寒暑の
逃避のみではない、土と自然の廣
き自由の世界への憧憬に萌して居

る。人が自然に還つた時、土に親
しむ時、そこに何の苦情も偽もな
い。天使の如き子供達が、地球上
何れの存在よりも、最も自然に、
最も大地に頼いて居るが爲に、何
物にも怖れず、天真流露にあらゆ
る人生を謳歌し得るのである。

十字街頭に立つて、暫く行路の
徂徠を見る時、電車、自動車、自
轉車、人の行くを遮らぬものとて
はない、人は皆都會生活の繁劇に
目まぐるしくも立迷ふであらう、
然し子供達の姿を見よ、是等の交
通機關に、何等の懸念もなく、心
ゆくまで大地を踏んで活歩し、反
て自動車、自轉車それ自體がこの
赤裸々なる天使の爲に、方向にふ
み迷ふであらう。

◇ 晩春の頃から、私は子供と共に
二坪、三坪の土を掘り返し、そこ
に草花と野菜の幾種類かを蒔いた
やがて芽ぐみ、一雨毎にのび、寸
より尺へ、蕾を持ち花の色香も漂
ふ。朝な夕な、土より延び出づる
その自然の成長を、芽の尖端をつ
まむで引伸してもやりたいほど、
愛の執著に心は燃ゆる。

人が子を愛し、漸く笑へば更に
何か物語る事を、次より次への刻
那の成長を冀はぬ日とてはない、
その親の希ひと些のけじめがない
ある夜、街頭で求めた草花の鉢を
我庭の土に芽生へた物の傍に置い

もう人間でなくなるのだといふ

死刑場

京城佛教經濟會

小水眞二

「コ、が死刑場であります」
とこう聞いた時に、自分は異様な衝動を感じた、餘り廣くない室の正面に、色あせた白布が垂れてある所が、法に審かるゝ人の、一切の罪一切の悪が、終末を告ぐる死刑場である。

白布を除けて見ると、上の方から一筋の太い繩が垂れて、其端が首をかけるワナにつくられてある其繩の垂れてある、下のユカ板は一方が蝶番で、後の方のハンドルを廻轉すると、他の一方がはづれ落つるようになって、其下は彼の屍をつゝむ暗黒があるばかりである。

自分は、今迄死刑、絞首臺、斷頭臺、といふような言葉を見聞したり、又は佛蘭西革命の恐怖に戦く死刑場の場面を讀んだりして居て人間の命をたつ慘憺たる有様を想像して居たが、今眼のあたり死刑場を見てあまりに簡単に最後の審きが済むといふ事を聞いてヤレ〜といふ氣持がした。

死刑執行の時になると、彼は監房から最後の歩みを刑場へ運ぶのである、そうして定め座につくや死刑執行の宣告、最後の教誨、それが終ると白布にて目隠しが施され、上から垂れてある太繩のワナに首をかけたユカ板に座するのである。
そうして一秒二秒と時の過ぎ行く

頃、後の方のハンドルが廻轉すると、彼の座して居るユカ板の一方がはづれ落ちると同時に、繩の端のワナは身體の重味で自然に首を絞め、暗黒にぶらさがつて彼の現世に於ける呼吸がとまるのである。

かくして天人ともに許されなかつた彼の今迄の罪業は、只だ此瞬間に法の審きからは永久に解放されるのである。

係の人の「こんな工合になりますよ——話を聞きつゝ、後の方のハンドルを廻す音——物凄く寂莫を刻む——に、耳を傾けつゝ、蝶番のあるユカ板の落つるのを、今か〜とジツト凝視して居たがガタン！、それは何の餘韻もない淋しい音である。

思ひなしか、其處に法の威厳を示すいひしれぬ強い力のある事を感した。

其ユカ板が落つると同時に、下の暗黒から吹き上る濕っぽい空氣は、さきに罪の淨化をした人達の屍に觸れて居たものか、非常に冷たい。

自分は或る死刑囚——死刑を免かれたのだらうが——の其刹那の苦悶を讀んだ事がある。

「今一分たつたら、今三十秒たつたら、今ユノ四分の一秒時たつたら、今直ぐに、魂が、自分の身體から飛びだして了ふて、

もう人間でなくなるのだといふ事を意識するのが何より恐ろしい事だ」

といった言葉を思ひ出すと共に、其苦悶に泣き死に逝く彼の最後を最後迄見守らなければならぬように運命づけられてある人々の、心の中を想像して、其望を出たときに重荷をおろしたように、ホットした。

◆江湖風聞録

吉田 莊一

大邸の新聞社長河合繼雄君が、現代のいろ／＼な大家の畫、書を有つて居る▲奇特なことだと感心すると、全くだ……と前提して、さる人の語る處に依ると、慶州には近來いろ／＼の人が来る、そこで大家でも到著と聞くと、そこは新聞社長だ、驛に迎へる、自動車に乗せる（氏はそれを持つて居る）おマケに御案内しますから拙邸へ……大抵なものは煙にまかれる、マンマとわなにかゝる、斯くして十日も、二十日も河合邸に世話になる。結局二枚か三枚は残して行く、まことにいゝ商賣だ……なるほど、河合さんだ、實に敬服……

◆琵琶の恩人

石川 利夫

風紀廓清問題の起つて居る京城辯護士界にも、覆本さんのやうな立派な風格の士もある▲京城琵琶界の今のやうに發達したのも、氏の陰然たる助力が與つて大きに居るといふ▲氏にはいろ／＼なうつくしい逸事がある▲味噌と糞とを一所にしてはいけない。

東京にて

殖産銀行 深尾道恕

松本さん

今私は東京に来てゐます
 出發前石川君からたび／＼
 原稿の催促を受けました、
 まさか東京まで追掛けて催
 促されることもありましま
 いが、一寸暇を偷んで筆を
 執ります、之が原稿になれ
 ば何よりの仕合です。

東京には丁度二年ぶり
 す、震災後の變化を今初め
 て見る私には、この二年の
 間の變り線が著しく目に映
 じます、汽車が横濱鶴見と
 だん／＼東京に近くにつれ
 トタン屋根のバラックが建
 てならんでゐるのを奇異に
 感じたのでした、その有様
 はまるで殖民地気分です、
 それに今度初めて見た事で
 すが、所謂文化住宅と云ふ
 のでせう、唯だ防蝕劑を塗

つたばかりの荒板——無論
 匏もかけてありません——
 で出來た洋風建築が澤山あ
 ります、文化式か近代式か
 知りませんが、餘り感服出
 來ぬ代物です、こんな家に
 住まねばならぬ東京人の心
 の荒ぶのも驚る當然でせう

私は先達の日曜日にと野に
 參りました、そうして山王
 臺から下町の低いトタン屋
 根のギッシリ建てつまつた
 有様を見ていやな氣持を懷
 きながら竹の臺を通り掛り
 ました、五六人の若い男が
 木をぬいてゐます、無論小
 さな二尺あるなしの苗の様
 なものですが、それを紙に
 つゝんでゐます、多分下谷
 あたりの人でバラックの空
 地にでも植えるつもりでせ
 う、震災前公園の真中で、

木を盗んで往く者があつた
 でせうか、これも人心の荒
 んだ一のしるしです。

松本さん

これから話の方向を少し
 變へませう、東京に著いて
 から間もない事でした、私
 は婚禮の披露宴に招かれて
 華族會館に參りました、食
 事の終るまではたゞ蒔繪の
 椅子にケバケバしい身なり
 の人が澤山ゐると思ふた以
 外に不思議ありませんで
 したが、食後リキニール杯
 が運ばれる頃ポツ／＼私は
 奇異を感じ出しました、ダ
 ヌンスが初まつたのです、そ
 れだけではありません、花
 嶽さんがとう／＼よその若
 い男と相擁して踊りだした
 のです、一座はヤンヤ／＼
 とはやします、私はなんだ

か、馬鹿くしくして仕方がない、皆の賑はいを他所に譲りましたが、恐らくまだくく踊りぬいたことでせう。思想の後れたと申すか、こんな趣味を解せぬ朝鮮の野人は一驚を吃しました、しかしこんな社會もあり、こんな傾向もあるのではないかと考へたことでした。

松本さん

震災以來郊外の發展は目醒しいものです、我もくと郊外に移つたのです、私の家も大勢に相應して郊外に引越しました、新宿の先で笹塚と云ふ京王電車の停留場から南八九丁の所で、朝は床の中で雲雀が聞かれます、障子を開け放せば武蔵野の森や丘の新緑が目の驚める様です、こんな氣持は東京の真中や、禿山の朝群では到底味はれずまい、こう書き出すと如何にも申分のない、所の様ですが、郊外は郊外だけの不快と不安があります、この附近もとくく畑であつた所を新に住宅地としたのですから、雨中の道路と來たら逆もお

話になりません、こんな中を荷物自動車に怪音をたてながら泥道をいやが上に引掻き通ります、或る所の地主達は自動車除けに十數間の間澤庵石程もある玉石を道路一面に敷き詰めたものです、その結果は餘り自動車除けともならず雨の日はこの玉石の上を歩く私共を困らせるだけです、それでは雨が降らねばそんな苦痛もなさそうですが、そうでないらしい、天氣が續くと畑の土が風に吹き捲かれて、灰の様な埃りが立つそうです、こんなことが第一の不快です、それに又一の不安があります、それは泥棒です。

松本さん

私は泥棒に襲はれました、華族會館で驚かされた夜更に泥棒に驚かされたのです、深夜不圖眼がさめた、私の頭の上の電燈が明滅したと感ずると共に黒い人影が目に入りました、私の意識はまだ朦朧としてゐた、しかし『だれ』と誰何すると同時に泥棒と直覺した、私は

飛び起きると共に、泥棒と怒鳴りました、黒い影は中廊下に出た、私も追ふて廊下に出たが、恐怖を感じました、追いつめてはと思つて、私が足を止めた時初めて私自身の氣がしたのです、泥棒が全く逃げ終つたと思ふ時、家中を捜すと湯殿の錠前をばづし、脱衣室との界の硝子障子を破つて闖入したのです、先づ私の寢室に這入つて一仕事せうとした所を私が眼を覺ましたので一物をも掠め得ずに逃げたものらしい、人を駐在所に走らしましたが巡査が來たのけ、夜の明方、全く後の祭です、私は泥棒がどうして居直らなかつたか、何うして無謀にも私は騒ぎ出したか、今考へても恐しいことをしたと思はずにはゐられません、同時に双物でも振り廻はされなかつたことを天祐だと思つてゐます

松本さん

餘り東京の悪い點のみを書きました、無論好い處もありません、好い點は次の機会に譲ります。

避 難 民

内 田 竹 三 郎

(一 八)

草原千里避難車に月照り渡る
時：紀元二千五百八十年九月
廿五日午後五時

場所：西伯利亞バイカル湖
チタ市

避難民……二百二十五名

輸送指揮官……准尉某

保護兵……十二名

軍事輸送……炊器車付

× × × × ×

○引揚げの報導は、余が西伯利
出發の準備を整えて居る、大正七
年八月頃から事實引揚げの大正九
年秋季迄に、無慮七八回、夫れも
重にも、新聞の誤報憶測やら、風
聲鶴唳やら、或は爲めにする排日
鮮人の宣傳やらで、其の真相は或
は當の駐屯軍司令官たる、師團長
等にも、參謀本部の命令(又は内
命?)到着する迄は、全く不明と
ボカスより外に言明の仕やうはあ
るまい、延いて在留民や、六七等
官の副領事級程度では、我々と同
じく五里霧中が當然の事と思ふ。

○引揚げの噂が宣傳せらるゝ度毎
に、居留民會長や同評議員なる輩
が、居留民大會なるものを開ひて
軍隊撤退の取消、相當部隊の駐屯
居留民の殘留者に對する保護法な

どと議決して、建議、請願、打電
などの方法に、一生懸命なるは、
申す迄もなく、若しも萬一聊か政
治を解するの輩が、冷靜の判断よ
り本國を離る千里の異境に、七八
百の在留者を保護するため、何萬
の大軍、何億の國費を投じて、單
に邦人發展の爲めのみ、駐屯す
る事由なき事でも、演説しようも
のなら、斯の非國民めがと、寄つ
てたかつて、頭をドヤシ付けらる
ゝ位は、覺悟の前ならざるべから
ず、だから、多少でも志あるものは沈
黙の外はない。

○要之にだ、十年廿年の古き在
留者は、西洋洗濯屋、理髮屋、時
計修繕屋が其筆頭で、其他はロス
相手の賣淫屋である、是等は屑々
たるもので、其大部分は全く軍隊
見當ての商賈である、其れが引揚
となられては己れの目算が違ふの
だから、軍隊撤退の不可を高唱す
るのは、無遠慮なる我田引水主義
である、其主義を攻撃するのだけ
らドヤされる譯となるのである。

○何十年の昔、報效義會の旗
を押し立て、墨田川を漕出した、郡
司大尉などが、古稀以上の乾干ひ
た老骨を掲げて、均しく西伯利開

發の急先鋒だなどと壯語して、此
大會に列席して曰く、諸君は引揚
げ〜と恐怖して居るが、そんな
事は絶對にない、今の鈴木師團長
(現朝鮮軍司令官)は年は若い
が感心だ、赤軍の跋扈跳梁を、ジツ
ト我慢して引き付けて一網打盡の
に遣つ付ける策戦らしい、扱て赤
軍全滅の結果はどうなる、寧ろ撤
退處か、是れから益々發展す可き
である、何等の杞憂をやと、大に
一同が小供扱されたものだ、而し
て其翌日居留民は全部撤退すべく
一人たりとも殘留を許さずとの嚴
命だ、矢張り軍隊の事は、キビキ
ビとしてますな、此間引揚げ迄の期間
五日間。

○居留民は九月二十五、六日の
二回に渡りて約三十輛の貨車に乗
込みしめ、荷物も大抵のものは携
帶せしめ、露領だけは夜行せず、
食事は一切軍隊給與で、豊富極ま
るものである、下車驛はハルビン
ニコリスク、浦鹽に限り其三ヶ所
より朝鮮、滿洲乃至母國に引揚げ
るものには、其行先地迄の便益を
與へる、尙三ヶ所に留り若くは其
附近に移動するものには約三週間
位、貨車内にての居住及び食料を
給與する、斯んた時には始めて國
家と云ふものは、難有いものだと
思ふ。

○軍隊駐屯地が沿海州に縮小さ
れたので、余はニコリスクより更
に北行して、ハバロフスクに至り
同所に約二ヶ月、茲も亦同年十二
月十二日に引揚げとなつて、ニコリ
スクに落付き、次で十二年三月亦
々ニコリスクを引揚げ京城の古巢
に舞ひ戻つた譯である。

○余は自分自身は稍々運の良い
ものと己惚れて居る、而かも事實
は案外の不仕合者の結果に到着し

て居る、人生の下らなき、將亦妙

農と、おゝ畢竟我に於て何があら

く席に寝りました時、一個圓袋の

居留民の殘留者に對する保護法な

た老骨を掲げて、均しく西伯利開

は案外の不仕合者の結果に到着し

て居る、人生の下らなま、將亦妙味てふものは、斯んなものかも知れない、滿韓在留滿十年の事業、信用、勢力の一切を破壊せられて啞然たる自分は、人間と蟬蛻の一生と、何等の差違ありやと、つくづく自分の無價値に呆れ返つた。

○儘よ三度笠積ちよにかぶりで出かけたのが西伯利三界、もう宜い加減の老境だ、何等の目的、何等の定見ある譯ではない、儘よ三度笠の價値は其處にある、扱て來て見ると一の歡樂郷だ、凡てがニチウオ、仕やうがないさの一語に人生を厭棄してある、苦を超越して居る、赤軍と白軍と、帝王と勞

農と、おゝ畢竟我に於て何があらんやだ、晝は終日ウラジンカと唱へて遊び廻り、夜は終夜、ありつたけの一張羅に盛裝して午前二三時頃迄踊つて踊つて踊りぬくのだから貧富なく貴賤なく、國境なしだから更に愉快だ。

○嘗て余が大正九年の年賀狀に謂ふ。朝鮮を追はれ滿洲に立を得ざりし身が軍隊ありとは謂へ、何等母國の勢力なき當邦に於て憂如たるを得ること○○○○○の價値に疑なき能はず。云々零下四十度内は裸體のダンス哉。

あすのお天気

京電會社營業課長

寺村 虎 重

平田 久 雄

く席に戻りました時、一週間後の天氣がわかるものかといつて頭をかゝす野次先生はほませんでしたそれから一週間の日が過ぎて野外禮拜の日が來ました。朝まだき夢はや醒めて起き上り寢間のカーテンを押し開いて硝子戸越しに外を眺めますと、シト／＼と絲の様な春の雨が此豫言者を罵るものゝ如く音もなく降り注いでゐます。何時の間に眼を覺したのか十四になる男の子が夜具の中から『おとうさん、雨?』と聞きます。前の日曜日の出來事を思出して私も遂々頭をかきました。

私共の運動會は用意畧端滞りなく進行して慇々あすの日曜日に開かれます。十六日の夜の空は密雲に閉されてゐます。天氣豫報は『晴、一時曇』あすのお天気は晴? 雨?。(五、一六、夜)

◆無駄ばなし

四月の某日、お定まりの晝食を濟まして連中と共に窓から差し込む暖かき春の光に甲羅を乾しながら例の食堂會議に花を咲かせてみました。誰れかの發議で春の運動會をやらうではないかといふ緊急動議が持出されますと、誰一人反對を唱へる人のあらふ筈なく、忽ち即決可決、話は早や當日の趣向や日取、場所の事等に走つて其能率の良い事、やがて五月十七日に日取が定りますと、私の前に向ひ合つて座を占めてゐるS君、矢庭に立上つて窓の方に足を運び、『どうかお天氣ならばよいがなア』といひながら一ヶ月向ふの青天を眺めました。此の餘りに奇妙な振舞

に可突しくなつた私は『Sさん、よくわかりますか』と聞きますと、始めて氣がついた様に頭をかきながら席に戻つて來て苦笑してゐました。

此の事のあつて數日を経た或る日曜日、教會の禮拜が濟んで私共は其次の日曜日に行ふ野外禮拜の打合せのため教會の地下室に集まつて協議を始めました。何處でもやる様に此處でも雨が降れば何うするかといふ問題に花が咲きます此處でも一週間後の天氣を占ひて地下室の階段を上つて空を仰いでゐる人があります。第二のS君が『大丈夫ですよ、雨なんか降るものか』といふ斷定を下して元氣よ

京城府尹となると、月の中二十五日は宴會、自宅で晩飯を食ふことは殆ど數へる程しかないといふ▲これに次ぐのが商議書記長、二十日は宴會の酒を飲むといふ▲そこで寛厚な大村書記長『私は谷さんに同情します、世間の義理も斯う個人生活を壓迫して來ては、苦しくつてやり切れない、晝の勤務の上に、更に夜勤がつくんですからね、ヨホドの健康者でないといつとまらぬ』と、御尤も……大に同情する▲それでも朝鮮ホテルとなると先づ二時間か二時間……それ程苦痛でもないが、日本式宴會となると、その開會を待つだけで二二時間、始まつてから亦た二三時間……全く助からないさうな。

高麗燒の話

京城富田商會 富田儀作

[110]

個がその値數萬圓といふ折紙付のものがあるのです。しかも夫れ等が大抵此の朝鮮——つまり大昔の威鏡道方面から出たものに多いとなつて居るのであります。

◆局の窓から

吉田 莊一

京城局の橋川さん、いつも閑雅なおつとりした隨筆を書かれる▲そのお話も亦おもしろい▲あの局長室の窓から、局前に右往左往する通行人を眺められる『そこに、人生の或一面が、提示されて居るやうに思ひます』▲實際、橋川さんは、靜に考へる人である。

◆一服清涼記

平田 久雄

京電會社の武者さんのやうな人ばかりなら、雜誌記者も張り合がある『今月のは仲々いい、先月のは……』なか／＼よく讀んで居られる▲それと、李王職の末松さん『あれだけ原稿をあつめるのは……』斯ういつて、大に勞をねぎらはれる▲そこで亦た、一元氣ついてテク／＼と膝栗毛にむちうつ。

◆岫雲搖曳錄

石川 利夫

仁川では、松林里といふ靜かな處で、高雅な趣味を樂んで居る人に茂木さんがある▲商賣は、醬油の製造と聞いて居るが、洋畫には、素人ばなれした技術がある▲たしか寫眞もお上手と聞いて居る▲われ／＼の隨筆道へも参加せられるやう、二三度手紙を出しておいた▲氏はたしかにわが黨の士である

六

書畫にしても刀劍にしても、一箇又は一口で其値が數百圓或は數千圓に上ると等しく亦燒物でも頗る珍奇なものになると、茶碗一箇が五六百圓もしたといふ例があります。大體之れは何が故でせう。勿論斯うした値打のあるものは書畫の類刀劍のたぐひと同様に素人眼には却々判り難いのですが、その道に眼の明るい人から見ると一見してそれが判るのであります。然らば其古茶碗一箇が數萬圓もするといふのはその茶碗の如何なる點が値打を有つて居るかといへばそれは決して色合ひばかりでもなく又形ばかりでもない。その茶碗のみに見る事の出来る何とも云ひ得ない獨特の雅味であります。つまり其茶碗が有して居る處の雅味を五萬圓なり六萬圓出して買ふ事になるのであります。而して其雅味は燒物にどうしてつくかと申しますと、それは一口に云へばその茶碗を作つた時製作人の精神美が籠つて居る爲とでも申しませうか云ひ換へると茲に價ひ五萬圓の茶碗を作り出さうと考へて製作するとしました處でそれは到底望むべくして行はれない事であります。

七

私の考へる處では恐らく將來加

何に其技術が進歩し又如何に巧な人間が出るとしても決して今後の世界に一箇の茶碗で五萬圓も六萬圓もの値打のある品を作り出す事は絶対に不可能だと考へて居るのです。何故かなればさうした再び得難い處の珍品は古い／＼昔燒物を作り出してまだ間のない時、外になすべき仕事もなく只其方面にのみ趣味を以て無心に作り出したものが斯く如く精神美の籠つたものとして現れ、金錢づくや經濟的觀念が少しも交らず全く無念無想の間に作り出されたが爲に斯うした珍品が生れ出たのであつて、値の貴いものは決して近頃の作ではない、古い／＼昔のもので此の頃でもよく威鏡方面などから發掘されるものゝ中に折々發見するのであります。つまり新羅時代若しくは夫れ以前の作にさうしたものが出で、我國に於て昔から珍重かられて居るのは大概此の朝鮮の土地から渡つたものであります。此處が結局燒物を作る者の苦心となる點であります。

八

即ち現在内地の素封家や、その他名家などに累代傳はつて居る處の殆んど寶物のやうに珍重され、大切に保存されて居るものは大概専門家が鑑定して見ると本當に値打のあるものが多い、所謂茶碗一

私の考へる處では恐らく將來如

打のあるものが多い、所謂茶碗一

▲氏はたしかにわが黨の士である

堀内満輔氏初老の宴に

發起人として

古城梅溪

わが敬愛する堀内満輔君は、明治十八年六月五日の誕生であつて本年本月本日——丁度満四十一歳數へ年四十二歳に達せられたのであります。

厄年とか何とか言ふと、それは迷信だと、一口にケナスものもあるが、人間の身體が四十三を一關期として、漸次……衰頹でなくとも、もうこれ以上に發達しないことは、醫學上根據のあることで初老——といへば、これから向ふ十ヶ年、或は二十ヶ年は、人生最も大切な一時期なのである。私共は、この會を開くことの、決して遊戯的でないことを、自ら深く信ずるものである。

堀内君は、埼玉縣秩父郡に生れました、即ち生を銘仙の本場に亨け十餘年前渡鮮以來、一意銘仙を以て、奮闘努力せられ、その眞摯なる人格、聰明なる舉措、進歩的態度……斯うして須臾にして、本町第一流の商舖となり、今日では押しも押されぬ京城屈指の一巨商である。

みを守る人でない、おのれにのみ厚うして、世間や他人を顧みない人ではない、商業の方では實業同志會を開き、京城商業の進展について、夙に同志と共に研究、調査を行ひ、他方には一人として有爲の青年に、資をさづけて、學業に勉勵させつゝある、公共公事に於いて、曾て進んで、喜んで盡瘁しなかつたことは一度もない。更に君は、趣味がひろく、商人としては尊敬すべき、否、驚くべき文才の持ち主であつて、その時々『京城雜筆』に寄る長編短篇、つねに私共をして、測るべからざる才情に、畏敬の念を起させる。：題名は忘れましたが、いつか君が稿した一短篇は、ふかく花柳界の眞相、機微にふれ、その社會で一大動搖を來したとも聞及んで居る。……堀内君は、木石漢でない一方には立派な一箇の粹人である。右やうの點は、すべて私共の敬服する處であつて、同時に御來會皆様の齎しく感を一にせらるゝ所と信ずる。そこで、この尊敬すべき堀内君の、この留意すべき厄歳

を、無事平穩に經過せられ……單にそれのみでなく、これから始まる所の初老期を……その全期に亘つて最も適切、有意義に善用せられ、益々光輝ある生涯を完成せられむこと、恐らく満場各位の一同に念願せらるゝ處と信ずる……。

◆勝利の甚會

石川利夫

實業界の巨頭連は、月に一回か二回かバコタ公團内の『勝利』に會し、ふだんの繁務の息抜きとあつて、大に暮を戦はせることになつて居る▲先づ最強者の有賀殖銀を始め、河内山、井内、住井、和田伊藤、西村、澤村、三崎……それに漢銀の韓頭取といつた處▲有賀さんに向つて二目乃至三目が三崎氏▲伊藤、和田となると三目、若しそれ井内、韓さんと來ると、四五目……澤村さんとなると、もつと落ちるといふからたのしい——正に我黨の土である▲勝利のみみさん曰く『そりや皆さん熱心です、外の宴會ならスグお歸りですが、これだけはお氣晴しですからぬ』。

◆醫家の入選

吉田 莊一

この間の鮮展に、衣笠さん、工藤さん、中島(貞信)さん、ドクトル連中が肩を並べての入選は何しろめでたい▲中島さんは、人も知る通り明治町に住んで居られる▲書や畫も勿論お得意だが、話の方はソットおはこだと聞いて居る。……と書いて居る所へ、同氏の『謠曲推獎』が到着、なるほど蘊蓄の深さが思ひやられる。

南漢山

總督府專賣局 青木戒三

【三】

先日總督が南漢山へ登られたいお話があつた、席にあつた僕京城在住十八年まだ南漢山を知らない況んや黃州の南漢山と始興の冠岳山とを、混同して居つた様な譯で十八年に對しても甚だ相濟まぬ儀と、請ふてお供をする事にした。案内役の時實知事さん日を六月九日とトする、總督さんは涼しい中にと朝五時といはれる、知事さん頗る難色あり、僕一時間を緩和して六時出發ときめて頂く。

一

九日早朝總督邸に集る、一行は總督さんの外、案内役の知事さん説明役の加藤灌覺さん、法務局長松寺さん、秘書官、通譯官、御用掛、其の他十數人である。僕は日中山登りの暑さを思ふて、白の詰襟に赤脚絆、手には移殖履を入れたツツクの袋を持つ、山の草花を廻らうといふのである、知事さんから即時に山林監守の任命を受ける、六時を過ぐる五分、一行三臺の自動車に分乗して官邸を發す、往十里を經、箭串橋を渡つて、利川街道をまつしぐらに曉靄を衝いて進む、白服の山林監守寒くてたまつたものにあらず、警備上困る

といふ林警部に、強て席をかへて貰つて運轉手の隣りに乗る、展望は利く、塵は來ずエンヂンの熱で頗るいゝ氣持である。道は裕陵の森林をわけ廣津の渡で漢江を渡る渡し舟を發動機船で引張るのは、思ひ付きである。廣州の全郡守さん、山根署長さん其の他の有志此所まで迎へてくれる。加藤さんの説明がそろ／＼はじまる。此所より郡廳の自動車も加はりて、四臺の自動車黄塵を漲らして走る、八時前十分光池院に著して車を捨てる。

二

光池院では有志、學童堵列して一行を迎へる、總督さん親しく挨拶せられ生徒の頭を撫して年齢などを問はれる、涙ぐましい光景である。此所に十數臺の朝鮮輿が用意されてある、虚勢を張つて誰れも乗らうといふ者はない、乃ち總督さん用及豫備として四臺を伴ひ他は皆歸す、總督さんもしばらくは歩かるゝ。此の日天氣晴朗にして一點の雲なくと、小供時代の記事文をつくりの好天氣であるが、時の進むに従ひ暑さは相當である總督さんも汗ばまれた様なので輿に乗つて頂く、何誰か乗りませんかといふと、言下に應と答へて松

寺さんが乗られる、外には乗る者が無いから、他の二臺は空の儘従ふ、期せずして輿に乗る資格は五十歳以上といふ事になる。歩く中に足は疲れる、日は暑くなる、郡守さんは大兵肥満である、おまけに病後とあり且つはモーニングの第一公式である、迎もたまるまい又知事さんは案内役であり苟くも一道の太守である、此の兩人は年齢の如何に拘らず、特別任用を以て資格を與へる事にする、郡守さんは先登、知事さんは殿、衆輿をとりまいて進む、警固の形である。一體、興兒きといふものは、ゆつくり歩けないものだそうだ、これと一緒に歩くのは可なりの努力である、時々興早きの息を入れる時、こつちも一寸一服タンサン水などを飲む。しばらく行つて既に城壁の一部が見える、少しも破壊のあとがないのに感心する。此の間に加藤さんの説明を點綴する道は山路としては比較的廣くして平坦であるが、東門に入らんとして俄かに急である、其の坂下に面長以下城内有志整列するの外、チャルメラ長鼓其の他例の樂器を持つた朝鮮樂隊が、一行の先驅をして、ピーヒヤラドンドンの大歡迎である、此の樂隊は歸途南門を出るまで、常に先頭に立つて奏樂してくれた、素的もない景氣である、懸急坂に取りかかつて衆魚串して登る、大汗になつて漸く東門に達し、アーチを通る薫風に胸を寛げて僅かに息を入れる。此の間二里時を費す事二時間餘。

四

城内は舊廣州邑内である、不便とあつて大正七年今の京安里に移つた跡であるが、尙百四十の戸數

東 城 雜 筆

を存し相當の部落をなして居る、元守護使を置いたあとで格の高い郡であつたさうで、今でも何となくクラシカルな氣分が漂ふ。東門を入つたところに又普通學校生徒其の他の堵列がある、其の前を挨拶して通り、地下水堂といふ蓮池を前にした堂に一憩、涼風懐に入つて汗頰に散する。松寺さんは御趣味病類に掛類の詩を寫し取られる面長が来て邑内初めて總督さんを迎へた光榮を述べる、總督さんは故老の事など問はれる、やがて邑内を通つて西將臺に上る、途中南漢勞動共助會の看板と、持ち去られた名鐘の鐘樓が空しく物置になつてゐるのを珍らしく見る、駐在所前には職員の方人方であらう、内地婦人三名許り、つましやかに列んで居られた、舊行宮の前を通つて慈山にかゝる、中々の急坂で長く、東門の坂どころではない、萬斛の汗を絞つて漸く登りつく。

五

西將臺は標高四九五米突、山城の一角に建つ、遙に北漢山に對して、南漢山城の名空しからざるを覺へる天然の要害である。臺に上れば四方の山川眼下に展開する、西北の一帶は漢江を隔て、京城龍山指呼の間にあり、京電の煙突、龍山官邸、總督府新廳舎歴々指すべく、こゝから大砲を打つ放したら京城は一たまりもあるまいと思ふ。説明役の加藤さん百濟が始祖温祚以來十三代此處に都したとか仁祖の時石築をして今年で丁度三百年だとか、城壁長さ約三里とか仁祖が清の太宗に攻められて京城を捨て、立籠り、龍城四十五日、寒氣と兵糧缺乏の爲降参したとか大臣にして君國を思はず、都にあ

る眷族を思ふて去つたものが多いとか、微に入り細を穿ち今見て来た様な話をされる、平素此の方面に疎い僕には有益な講話であつた展望に飽き種に上つて晝食を取る城内有志の御心盡しの朝鮮料理と薬酒が出る、中々結構である、持参の辨當をそつちのけにして體腹頂戴する、時間の都合とあつて急に席を撤し歸路に向ふ、午少し前である。

六

歸路は又舊邑内を通り、今度は南門を出でて西の方松坡を志す。門外で例の樂隊に分れ、輿組は輿に乗つて急ぐ、日け中天に上つて焦げ附く様に熱く、風は追手で少しも涼を送らない、僕は道草をしながら目的の草を探す、加藤さん此の手傳もしてくれる、後れては走り後れては走り容易な事ではなく、汗は白服の脊中を通す、山を下りてから松坡まで随分退屈な途である、プログラムによると二里強とあるが、松坡へ着いたが三時すぎ、輿と競争で正味三時間以上だから、三里はたつぷりあろうと何れも多少閉口垂れた顔色をして、漸く松坡に著く。入口には又堵列隊が居る、こゝで總督さん初め輿組は、輿の中なる華胥の國から下り立つて、そしらぬ顔して挨拶をせる、松取の部落に入つて例の碑を見る、清皇帝功德碑とある、蒙古文、滿洲文、漢文、三様に刻してある。こゝで清の太宗が、七十段の壇上に上り、黄色の幕を張り、黄色の服を纏ひ、黄色傘をさしかけて降を受ける、仁祖は王世子と共に、紺色の軍兵の服を著せられ、三跪九拜の禮をなし、酒をついで僅かに死を免れたと、例の

加藤さん目に見る様な話をする、此の地は養鷄養豚の模範里とありて總督さんはそれをも観察さるゝ、終つて江岸に出で、江を渡る萬斛の涼風に汗を収めて、有志の心盡じのもてなしを受ける。

七

汗のひいたのを機曾に、岸を下りて舟に上る、蘆島まで漢江を下る積りである。舟に上れば既に四時をすぎた、此の日の豫定は三時半京城歸著だから、案内の知事さんは責任を感じて心配さるゝ、恰も好し例の廣津の渡の發動機船が引き船に來た、知事さん大に悦んだが、一同は内心不平である。兵隊の行軍でも、晝寢して休む日盛りを、三里の間乾されて來て、やつと舟までたどりついてやれ、と思つたところである、急ぐ旅でもないものを、せめて舟の上でゆつくりと冷たいビールでもと思ふのに、發動機船とは何事ぞといふ譯である。併し天の助けで發動機船は故障を起して退却する、舟は流に従つて悠々とくだる。舟中思ひ／＼の飲物を取る、大島博士の冷凍酒も出て、それには總督さんの説明がある、世話になつた地方の人へ、總督さん一杯をせらるゝ、行き届いた事である、秘書官さんは膝を組んだまゝ、舷にもたれて禪定に入る、五時半蘆島著、此所で解散して宅に歸る、玄關に出た小供等皆笑つて、お父さんの顔は赤鬼の様だといふ。

記者曰く、青木さん南漢山に登られたと聞き、紀行一篇を乞ふよし／＼と快諾して、一氣に筆を驅られたるもの本稿……翌日電話で『原稿が出来てるよ』に記者その快筆に一驚。

彌勒出生以前

京畿道廳

時 實 秋 穗

一

昨夜本町を歩いて、近重眞澄博士の『彌勒出生以前』と、工藤重雄學士譯の『三十年前の朝鮮』を買ふて來た、未だ讀むで見る邊はない。

二

近重博士は、専門以外に禪に造詣の深い人である。從來禪に關係した書物も數種類出して居られる。『彌勒出生以前』の名前を見たときに、矢張り佛教に關係した著書だと思ふた。目録を見ると、主として博士が從來物せられた雜錄や、科學的小品で、初め思ふた

とは内容が違つて居ることを發見した。本の體裁から云へば、全卷を彌篇、勸篇、出篇等六篇に分けてあつて本の名前は此の篇分けの字句から出て居るとも見られる。文章軌範は、侯王將相有種乎の六卷になつて居るから、まあ『文章軌範』の代りに『侯王將相有種乎』と名付けたと同じ様であるとも云へる。勿論彌勒佛は今兜率の内院で修業中で、佛滅後五十六億七千萬年に娑婆に出世せられて、衆生濟度をせられると云ふことであるから、其の邊のことから現代世相の各方面に亘る解剖批判を『彌勒出生以前』と名付けられたものか

と思ふが、鳥渡見ては内容の分り悪い名前である。前に云ふた通りまだ讀むで見ると違がないから、内容の批評は出來ぬ。何れ各方面に觀察の鋭い博士の著書であるから立派なものに違いないからうし、書物の體裁も中々ハイカラに出來て居つて我々本道樂の書齋を飾るには恰好のものである。只書物の内容を知る便宜なしに名前丈見て買求め様とする人にはちと不便である。宗教の書物かと思ふて買ふ人があつたら、或は失望するかも知れぬ、一體此の頃の著述家は、何か珍らしい人の耳目を驚かす様な奇抜な文句を用ひたり、極めてつ

まらぬことをも感傷的に記述したりする癖がある、書物の名前にも此の種のものが少くない、中には厭らしい氣持のするものもある。名前丈見て面白からうと思ふて買ふて見て、全く失望する様な場合さへないではない。随つて新刊書を直接見ることの遅い朝鮮あたりの本好きにとつては、少からぬ不便を感ずることがある。最もそんな風の名前の付いたものが、一般から歡迎せられる今日であるから云ふて見ても仕方のないこと、一種の繰言に過ぎぬかも知れぬ。

三

工藤學士は本誌にも時々執筆せられたことがあると思ふ。讀書家で且つ何かに器用な人である。『三十年前の朝鮮』は、近頃面白い本であると聞いたので買ふて見る氣になつた。本の體裁は鳥渡滋味のある装幀で總督總監の題字もある。面白いと幾多の人から聞くの

で内容は面白いに違ひなからう、本の外見を通覧した所で、巻尾に付いて居る正誤表が目に付いた。最も三百餘頁の書物で、正誤表に表はれ居る正誤箇所三十五六と云ふのであるから、特にそれが多いとは思はぬ。世間には澤山誤字誤植があつて、其の儘引用でもすると飛むだ間違のある様な箇所を知らぬ顔して居るものさへある。之以外此の書物に誤字がないとすれば、今日の印刷としては上出来であらう。然し私は一體日本現時の印刷物に甚しく誤字誤植のあることが氣に掛つてならぬ。よし正誤表が附いて居つても、一々本文を訂正する人は、恐らく鮮いであらう。又私の様な本道樂は、一々下手な字で本文を訂正して本其の物を汚すのは惜しくてたまらぬ。昔の木版には斯様な誤字は少い様である。殆ど見當らぬと云ふてよい。外國の書物なども其の通りであるのに我國の印刷は實に酷いと思

ふ。之等は出版道德の缺乏と云はうか、一般人の無關心と云はうか、何れにしても面白くないことである。自分も實は厭な經驗を有つて居るので、他人のことを彼は云ふのではない。もし何か方法は無いものかと思ふのである。

四

本誌の主幹永樂町人が、嘗て私の宅に見えたとき、私の出した『京城三年』の體裁を評して、私が工夫したらもつと體裁のよいものになつたらうと云はれたことがある。本を愛する人から見ると、書物の名前や其の體裁や中々重要な意味を有つものである。只中味さへよくばとはどうしても思はれぬ。我々から見ると本其の物が一つの美術の様に思はれる。それは讀書家の云ふことではなくて所謂讀家の云ふことだと笑ふ人があらう。それでも仕方がない其の通りであるから。

(一四、六、六)

愛 硯 記

京城商業會議所

工 藤 重 雄

【二六】

元來無趣味な私は筆硯に對しても餘り註文を有たぬ、筆の形をして居れば字を書くに不自由を感じず、硯でさへあれば其の良否を問はず、墨も亦然り烏賊の汁で拵らへたものも香煙を固めたものも意に介せぬ。書の氣品は人にあり墨色は腕にあるものと心得、腕に覺へのないものが千金の墨、萬金の硯を所有しても此の頃の刀劍家が正宗を藏すると一般頗る滑稽味を帯びてクスグツタイ心地をして居た。成金輩が讀めもせぬに名家の幅を懸けて誇るのは憫れむべき喜劇である、此頃我同胞の醜婦連が鴨か鶴の身振を模するが如き洋装して男子の心膽を寒からしめるのは無智が導く女のたしなみである自ら撥墨の味を知らず墨色の雅趣が見へぬ私は成金の誇り醜婦の装ひを學ぶべく餘りに怯懦であつたのだ。然るに私は柄に無い一の硯を所有して居る、草刈乙女がダイヤの指輪を飾るが如く、腰辨が白金の時計を下げるが如く私に不似合の硯である。其の硯は舎兄擔雪居士の所有して居たのを一年餘遊を垂してトウ々々耐へ切れなくなりて貰つた、舎兄も人並勝れた愛硯家である以上指を切る如く辛かつたらうと思ふ。私は時々それを取り出して小娘が人形を可愛がるが如くに可愛がつて居る。墨摺り流すは書かんが爲めの所作で無い

只硯に觸れる時のタッチを心地よく感ずるが故である、淋しき部屋に見せて語るべき人も居ないが此の硯を手にした時に淡き喜びを感じずには居られぬ。數滴の水を垂らして墨を持つ指頭に微妙な振動が傳はる時に莞爾たる満足の喜を禁し得ない。石は端溪か何か私は知らぬが墨を摺る時には、慕ふが如く訴るが如く包容するが如く、美人の膚に觸るゝが如く得も云はれぬ快感を伴ふの嬉しい。縦四寸五分、横二寸一分、厚さ九分不正長方形を爲して、其色も重みも御菓子司虎屋の羊羹に彷彿として居る。而して硯面を除き他の部分は見事な文字を刻し刀痕極めて非凡である、悲しい哉充分讀めないのは私に漢文の力を不足して居るからである。今其文字を左に掲げて讀者の高教を仰ぎたいと思ふ

庚申春歲試清源干大寧寺中以白鉄購此於彼郭梅岩樓去劉漢垣又攫自梅岩手中歸而試之微憐以久不受水故也遂遷之于家灣近水處以收生氣而洩其事於門弟子弟子某姓者私愛之而藏諸家其州于臨市登茶肆置此肆中登簿記余見之數使人物色而不可得後亦不見壬戌正月余赴縣工科父見之云得自刑科案牘下積塵中然亦不甚愛惜也因巧得以還嗚呼數年之物復歸故主豈非數哉

歲以壬戌二月初日記于怡如草堂之靜凡
汗沁陳嘉謨識

とある。壬戌とは今から約六十年前か、百二十年前か、百八十年前か、二百四十年前か、或はモット以前の壬戌か、私は二百四十年の古物だと鑑定して居るけれども素人判断で素よりアテにならぬ。兎も角も眼玉の様に珍重して居たものが竊まれて三年してから又た手に入つた喜びの餘りに彫り付けたものに相違ない。而して陳嘉謨氏が如何に之を愛藏したかは玉の如き識書を以て『不可一日無此君』と彫付け、尙ほ『不彫不琢弗方弗正腹中有墨惜不自用』と刻して居るのでも判る。不彫とは硯池を掘らなかつた意味であらう、陳氏は珍重の餘り惜んで自ら用ひなかつたのだ。『石而竹介復節塵不磷摧弗折曠斯硯也而焉斯世所悅、壬戌二月陳嘉謨銘』と一方に刻してある、これも充分に私に讀めぬから讀者の高教を仰ぎたいものである。借ても此の硯に何と命名すべきか未だ適當な文字を探し當て居ないが、私は今此の硯が奥床しい光を包んで居る點から、名硯でありつゝ嘗て世に出た事が無いから、且つは舎兄を紀念する意味からして『韜光硯』と名つけて居る

◆山中一喝録

平 田 久 雄

南山麓に閑居して居る山口太兵衛翁の所に、時々無心者が行く▲スルト翁はきまつて之を謝絶する▲なかにはケツをめぐつて『あなた方がそんなことを言つては、我々は生存出来ない』▲ストル翁は勵聲一番『生存出来なきや死んでしまへ、死んだ方が社會のためだ』▲この手を喰つてスゴく引きさがるのが相當多いさうな。

宇宙我觀

總督府地質調査所 駒田 亥久 雄

昨大正十三年九月七日早朝に全羅南道羅州郡鳳凰面に隕石が落下した。この隕石は僅かに拳大に過ぎないが一の立派な星である。天體である。天體と云ふ點からは大小こそあれ吾が地球と同等の資格をこの宇宙間に有して居る可き管である。隕石自身に云はせると、落下したのではなく迷つて來たのだと主張するかも知れないが、兎に角人間など云ふ俗物の存在して居るこの世界に來たのが因果で耻晒しである。私自身からも研究だ

さも幅も高さも現實的に表示する事の不可能なる事を意味するのであつて結局は吾々の小さな不完全不徹底な興味だけで十分考ふる事の出來ない廣大無邊の空間が宇宙と云ふ事になる。勿論これは私一個の考へ方であつて人が然う信じなくとも敢て差支へはないのであるが或は多くの人が赤と云つて居るのを自分だけが青と見て居るのと同筆法かも知れない。赤色は澤山の人が集つてコンな色を赤と云ふはふじやないか。よからうと云つて初めて赤になつたのであつてこの色を見てイヤ自分は青と呼ぶ事になると云ふ様な異端者——
——があつたらどうなるか。青でない赤だ。イヤ赤でない青だと云つて見た所が一つの水滸論ではあるまいか。ダカラ多くの人が赤と呼んで居るその色を見て青だと云ふ人が居たら色盲だとか何とか云つて笑はずに云はして置けばよからうと思ふ。

なんのと云はれて紙の如く擦り減らされて顕微鏡下にヒネクリ廻されたり又擦り潰されて硝酸や硫酸等をプツ懸られたり焼かれたり散々な目に逢はされて誠にお氣の毒に思つて居る。今も其残りは私の机の片隅に然し大切に保存せられて來る人毎に紹介せられて居るのである。光榮の至りと稱す可きか因業の石片と呼ぶ可きか何れにしても今ではその性質も分明するに至つて居るが、それを晒け出す前に私は先づこの隕石が何處から飛來したかを考へた。勿論地球の他の部分からではない天空からに相違ないが天空だとすれば何處からか……モウ分らない。宇宙の或部分からと考へさせらるるの外はない。然らばその宇宙とはどんなものであるか。科學から論しても哲學から説いても數限りない説明が

私の宇宙觀も大がいのこの邊の所と同一論法だと承知して貰へれば間違ひはない筈である。

與へられ得る。蓄しその觀方によりて如何様にも説明が出来るからである。
最近學術の進歩によりて宇宙に對しても種々な限定的解釋が與へられて居る、或人は宇宙には限りがあると云ひ、又他の人は限界がないと稱して居る、一つの宇宙に二通りの説明は變であるがこれは即ち取りも直さずその人の觀察の仕方の相異に基くのであつて宇宙に二通りあると云ふ事にはならぬ。

ソコで私は宇宙と云ふ吾々の言葉で云ひ表はさるるものは無限數の天體を抱擁して居る空間と云ふ事に限定して見たい。即ち抱擁せられて居る天體が無限數である以上は其空間の廣袤も無限大であらねばならぬ。無限大と云ふ事は長

◆東西南北集

平田 久 雄

京日副社長宮部敬治氏、曾て東朝の編輯を統理し、亦た讀賣の編輯を主監したことがある▲新聞で飯を食ふことザツト三十年▲東京では『日本一の編輯者』の定評がある▲それから所謂新聞文章では簡にして明、微にして約、所謂玄人中の玄人が好くものを書く▲だからあれ位の人材は、前後を通じて

曾て京日に在社したことはあるまい……これは細井肇氏の談片▲前の京日編輯局長長野直彦君が、朝鮮にもどつて來る▲昨年總選舉に敗れてからズツと故山に病臥して居たのである▲そこで、京日の某氏に『いつ歸るか』と訊くと、その答へが面白い『八日か、十八日か……但しは二十八日でせう』『なぜ……』『いえ、あの人は八といふ字が大好きなんです』……こゝとほと左様に神經家であること、皆さん御聞及びのとはり。

椰子木立

總督府 市 村 毅

(二八)

◎熱帯地で旅人の眼を喜ばすもの一つは椰子の木立の美しさであらう、それは菩提樹の杜の様な深みを缺くかも知れぬが、檳榔樹の弱々しい姿に比べると何處かにしつかりして男性的な趣を備へて居るのがうれしい、海岸傳ひに潮風に吹かるゝ椰子木立の繁みの彩りと赤道近くの太陽の光に眩く輝く海の彩りとの對照、そこには南國ならねば見られぬ強烈さが見出される、朝の椰子木立、夕の椰子木立、雨の椰子木立など、夫等は一つとして美しくないものはない

若し夜更けて靜まる木立の間を月の光を浴びながら逍遙ふなどが出来るならば又それが蠻地であつたならば何人の胸にも盡せぬ感興が知らず／＼湧き出るに違ひない。

部落だけに人工的の技巧が餘り加はつて居らぬ處に面白味がある、傘を重ねる様に繁つた木立の中に見え隠れする原始的な土人小屋の群は必ずや旅人をして異様な思ひに耽らすであらう。

◎實際クママンもケヂャーも美しい椰子の村落である、一つはクママン河と其支流チユカイ河との會合點の椰子林の中に埋れて居り他は前に茫々として漣しない支那海を控へて居るのと、砂濱傳ひに立並ぶ椰子の繁みとによつて全く美化されて居る、クママン部落ではその上流の密林地へ鐵鑛を見に行つた時に約一週間を過ごしたことがあつた、クママン河中に突き出たレストハウスでそのペランダの椅子に凭れ、遙かに聞ゆる瀟瀟に耳傾けながら河畔を飾る椰子並木を眺めた時の感じは今日でさえ腦裡に深い印象を止めて居る、水に映る椰子木立の逆さ影、若し黄昏通つてヒタ／＼と潮が満ちる頃になると、赤い灯が椰子の繁みの間から漏れて、動くともなしに動く流れに映るのも、此椰子の村の忘れ得ぬ景色である、對岸のジャングルの彼方から圓／＼とした月が生れ出て、河岸の椰子木立にその柔い光を投げかける頃には、あたりはいやが上に靜けさを増して河面に時折跳ねる魚のために描き出される黄金色の波紋も美しい

◎やはり椰子の美で想ひ起すのはクママン河口を出てクアンタンの沖へ差しかゝる間に見た海岸の木立である、朝のスッキリした空氣の中に濃く浮び出たその鮮かさといひ椰子の丘の彼方、トレンガヌ州とパハン州境附近に聳え立つ薄紺色の高い山脈の雲とは甲板に佇む自分をしてどんなに熱帯の自然を讚美させた事であつたらうか

◎こゝで一言するが斯く吾々の眼に普通觸るゝ椰子は所謂コゝア椰子であつて、高さ十呎乃至三十呎にも達する幹の頂に鈴生る實からは椰子油がとれるのである、椰子の實は人頭位の大きさで、上皮を剥くと褐色の厚い纖維質が現はれ、更に此軽い纖維質の外包を取除くと硬い殼質の實があらはれるそして此中に包蔵さるゝ透明液は芳香があつて、土人のみでなく一般旅行者には渴を醫するに適當な飲料として重寶かられて居る、油の原料になるのは果實の殼の中に潜む脂肪性の胚乳であり、更に椰子油からはバターがとれる、コゝ

◎馬來半島を旅して特に椰子の美しさを感じたのはシンガポール郊外のタンジョンガトンと東海岸トレンガヌ州クママン、それにケヂャーの海岸とである、此中タンジョンガトンへはシンガポールから自動車ドライブすると三十分位で行くことが出来る、行儀よく植えつけられた其處の椰子園の間を右に折れ左に曲りつゝ走る道すがら木立を透して眺めやる海の色や、その間に散らばる清酒な別荘は見るから非常に明るい感じを與へて呉れる、是に反してクママンとケヂャーとは野蠻地の淋しい

ものゝ一つであらう、斯う言ふ晚にはよくレストハウスから架けてある棧橋を渡つて河岸の椰子の繁みの中に吸ひ込まれる様な思ひを抱きながらそちこち逍遙ふて、梢にかゝる月の姿の神々しさに思はず見惚れて居たものである、それからケヂャーの漁村にはブツキユアの鐵鑛を調べに入り込んだときに立寄つたことがある、クママンへ行く船を待つ間の退屈さに白い砂地に宿る椰子の黒い影を踏みながら、夕べの月に輝く支那海の雄大な姿や北の空低く閃く北極星を眺めやつて、遠く三千里を距てた母國戀しの情を起したのも最早過去の夢となつてしまつた。

した。しかし事茲に至つた以上

椰子は三年位で成長し、一度實た、深く静んで然も濁り氣味な處

ア椰子は三年位で成長し、一度實を結ぶとその後は年中花が咲いて實がなり續ける、何でも多いのは一年に二百位もとれるとか聞いた
◎コトア椰子と同じく多いのは河岸に繁るニツバ椰子である、水の中から直ぐ大きな葉が突き立つて殊に潮の干満のある處に見事な發育を示して居る、クママン河でもチユカイ河でも或はシンバンキリ河を溯つても河邊に殊更澤山見受けたのは此種の椰子の樹であつ

た、深く潜んで然も濁り気味な處には鱈魚が住むと云はれて居るが斯うした箇所に限つてニツバ椰子がよく生ひ茂るので、コトア椰子の美しいのに比べると、是は水中の怪物を連想する爲か、寧ろ何となく漢味を帯びて居ることは事實である、土人は此大きな葉を一枚切つ伐り採つて、その上皮から煙草巻紙の代用品を造つて居る。
◎鞆帯と椰子木立、それは常に懐しい想ひ出である。

した。しかし事茲に至つた以上、度胸を決め込み、何喰わぬ顔で眞面目に片棺先生の喜びさうな數言の遠矢を放つて置いて切抜けたが、今更其罪の深さを痛感し、其後一切戯れにも他人の人相骨相は勿論手の筋だにも口に出さぬ事とした。飄算からは駒が出る。冗談からは老婆が出た。呵々

陽明學研究

石川 利夫

冗談から 婆が出るの記

鐘路警察署

森 六 治

今は昔——一時吾れく仲間に
も人相や骨相の研究が流行つた事
があつた、僕も其一員に洩れず勤
めらるる儘に數種の参考書を買ひ
聊か生嚼つて居つた時の事である

日韓併合の翌年、或密命を佩びて
奉天へ出張し、用向の都合で驛と
城内の中間たる十間房に足を止め
る事となり、とある旅館に投じた
が、別に知人もなく素より連れも
なく徒然れの餘り、給仕女を捉へ
てからかい半分醜酌を傾けつゝ『
君、顔の色の勝れぬのは一體何う
したのだ……隠さうたつても人相
學者の前では隠せないよ』とツイ
冗談交りの二言三言が偶然にも彼
の女の身上の一端に觸れると、先
生益々乘氣になる、僕は杯の重な

るに連れ一杯醜嫌の出鱈目を吹く
之れが當るは、全く圖星的中
と來たので早速帳場に吹聴と來る
同輩の女中君、番頭君其家の誰れ
彼れとなく來るは、一度に五六
人押懸けて來た、其處で一策を案
じ出し、一旦三名以上は見ぬ駄目
だ、で甘く其場は切抜け、旅の
疲れと酒の勢ひでぐッすり寝込ん
だが、翌朝未明様側に何か人の往
つたり來たりする足音がするので
目を醒まし用便旁々出で見ると、

其家の老婆で最早棺桶に片足とも
云ふ先生が其日三人中の第一位に
此人相學者の鑑定に預からんと
熱望からの襲撃と知れた。始めて
昨夜の悪戯が餘りに身が入り過ぎ
たのに氣付き、冷水三斗の思ひが

京日經理部長の眞砂猛雄氏——海軍大尉だつたと思ふ▲熱心な陽明學の信者で、その道の人と聞くと未見の人でもドシク訪問して説を聴いて居る▲今も氏の宅には『陽明學研究所』の看板を掛けて居るが、前に大阪に住んだ時も、京都に住んだ時も同然——この看板を忘れたことがない「かうして置くと、好きな人はきつと訪ねて來ます」實に感心なものだ▲朝新聞編輯局長和田重義君、書畫の鑑定は中々うまい、時々掘出物をする▲この間も鄭板橋墨竹双幅を廉く買った▲玄入に見せると、時價二千五百圓といふので『どうだい、』と鼻息頗る荒い。

京城新名所

平田 久雄

明治町二丁目……京城局横の横丁は、わづかな戸數に過ぎないが、随分知名の土が住んで居る▲先づ辯護士の榎本隆氏、小川勝平氏、齒科の飯塚氏、耳鼻咽喉の中村氏……それから外科の和田氏、いづれもその社會では第一流の人物である▲京城新名所の一つに數へても宜いと思ふ。

階 級

京城寺尾組

寺尾猛三郎

【三〇】

測らむ水も決して平かなるものにあらず。彼の水の活動を見ずや。九泉より迸りて地殻を穿ち、忽ち崇々として溪谷を流れ、忽ち巖窟として瀑布を奔らす。或は滔々たる長河となり、或は洋々たる大海となる。巨瀾起つて青天に朝し、駭浪沈んで九地に潜む。散して雲となり霧となる、集つて雨となり雪となる。宇宙何れの處にか水平ある。人生も亦水の如く活動して休まず。流轉し變遷し、波瀾あり浮沈あり。或は青雲に昇り或は溝壑に墮つ。思ふに人生は悉く如水社なるべし、水平社豈獨り水平なるべけん哉。

階級打破の聲は尤もらしき體語として、甲唱え乙傳へ喧々囂々天下を風靡せんとするの觀あり。階級打破必しも悪るくはないが、何等の理解も無く信念も無き徒が、附和雷同争ふて階級打破を叫ぶに到つては、人を惑はし世を毒すること測り知るべからず。吾人毎に噴飯に値ひする階級打破論を聴き其理由を質せば、答は簡單明瞭にして千篇一律なり、曰く世界の趨勢なり或は曰く時代の思潮なりと或は然らん、素より勢には乗すべく抗すべからざるを識らざるべからずと雖も、而かも其勢は又各人の思想に因つて作らるゝものなることを考へざるべからず。是非を謂はず可否を論ぜず、論據に理想無く結果に推究を缺き、唯漫然として之を叫ぶこと、恰かも明治初年のよいじやないか踊りに似たるは笑ふべき哉。當時亦た事を好む煽動家あり、窃かに神靈護符の類を他の屋上又は庭中に置く。之を得たるものは御降り様と稱し歡喜して、よいじやないかよいじやないかと唱へて踊る。狂愚の徒附和雷同して躍り狂ふ、忽ち一村より一郡に、一郡より一國に及び、遂に全國に流行し。農は犁鋤を捨て商は牙籌を抛ち、唯だよいじやないかよいじやないかと夜を徹し

て躍りたるなり。此れも慥かに宇内の趨勢にして時代の思潮なりしなり。其國民の蒙りたる損失の甚大なるは言を俟たず。而かも今日の階級打破のよいじやないかに至つては、其事毒更らに幾千萬倍するを知る時。躍り狂ふ愚民に對し吾人は憫れむべきか笑ふべきか、將た憎むべきか怒るべきか知らず。唯流涕長大息あるのみ。昔は東坡馬上に殘夢を續けて朝日の升るを知らずと諷吟し、千古の風流談を遣せり。知らず今の愚者は誤れる天賦人權説と履き違へたる自由平等論の惡夢より醒めず。萬世に何物を流さんとする乎。實行し得べからざる言も、手段の爲め之を標語とするとき、意外なる效を奏することあるは、古今東西其例乏しからず。吾國維新の際、志士は銷港攘夷を標榜し。幕府を仆し代つて政權を執り、直ちに開港交夷を斷行せり。露國革命に當り、主義者は階級打破を絶叫し、王朝を滅し代つて政權を執り、新たな階級を出現しつゝあり。目的の爲め尤もらしきモットーを製造するは彼等の隨意なり。吾人は深く戒心せざるべからず。嗤ふべきは水平社の名稱なり。人類は平等なること水の平かなるが如くなるべしとの意ならむ。豈

階級決して打破すべきものにあらず、又打破し得べきものにあらず。然しながら吾人の深く留意すべきは、人爲に因つて設けられたる制度に、却つて自然の現象に倅るが如き缺陷を生ずること、あること此れなり。此缺陷の甚だしくして大なるとき、往々革命の起るは歴史の證明する處なれば、吾人は常に制度の缺陷を除く爲め改善に努力せざるべからず。而して理想の階級制度の下に秩序ある社會生活を營み、祖先より承けたる生命を子孫に傳へ、永く優勝の地位を保たざるべからず。階級を非認し其總ての政度を一棒打破せんとするが如きは、愚にして且狂なるものと謂つべし。

◆原稿紛失記

平田久雄

東拓志村さんにお願ひして『鮮展見物』一篇を、ものしてもらつた▲處が、何處でドウなつたかその郵便物今以て到着しない▲近ごろコソな弱つたことはない。

ないかよいじゃないかと夜を徹し
が如くなるべしとの意ならむ。豈

コソな弱つたことはない。

花ちゃん

朝鮮ホテル 伊藤 龍

てゆく。

彼は奇立つ。彼は沈思す。

花ちゃんの謎の言分と黒子の含んだ謎と等分に見比べて、いつか解ける日を持つ彼も微笑んで、夕涼の訪れを日課として数へた現在から、辿りゆく路も、彼は考へたに違ひない。

× × ×

御立の蔭に佇む影法師が話して呉れた其儘を筆に走らした。

未知の友、『花ちゃん』とやら御迷惑だらうが、テーマの女性に成り済まして頂戴。(一九二五、六、四)

◆一堂侯の書

石川 利夫

まーい、／＼真まるい、
登の様な、月が、……』
と兒童の戯れに歌ふ聲に擬らへた線で書き出された様な、猶ほ目に張りのある、そうして、あどけない表情と言葉付が、京都訛でそれが明るに調和して、彼のやうな東の都育ちの耳朶に觸れると、なんとなく、優しい氣持が、彼女の胸底に潜んで居る様に感ぜらる。其優美な氣持を攫んで見たい慾が挑まれる彼を知る。

或る日の午後花ちゃんから、斯んな事を云はれて、彼も思はず顔に赤味を染めた事がある。

『あたしどすか……あたし、惚れて居るけど、及ばぬ鯉の瀧登りさかいあきらめて居ます』

彼の波立たぬ胸底に、渦巻く波状の香色を聞いた。明瞭な記憶が刻まれて、彼も手繰らるゝ絹糸の線に心が、彼女の身に引著けられ

眞晝の様に煌々と輝いて居る電燈がぶら下がつて居る。

無駄に吹かす燻煙が立ちのぼつて電燈の反射を遮切るに其邊りに低い雲を形造つて居る。

熟柿の息で染められた空氣も濕ふて居る。

男と女の笑ふ聲が交々走つて居る。

斯うした氣分の漲る場所は……と云へば、カフェーの夜景の舞臺面に過ぎないのである。

夏夕の涼しい風波に送られながら、軽い浴衣姿で夜の街路をぶらり歩きも獨身者の彼としては、尤もらしい趣向で、又慰安ともなつて、猶其ステージの演技者の片割れとなるのも安價な悦樂として分相應な仕向と想はれる。

本町通りの、とある横路に、京城の町には珍しく、感じの好いカフェーがある。時折、彼は訪れる

エフロン姿の活々した女給達が各自獨特の演出法で、ステージの華やかさを立寄る散遊の若人達に振り蒔いて居る。

彼女等の中で、社會から教へられた飾氣なく無邪氣に生きた『花ちゃん』と呼んで居るうら若い女

京 城
つれつれ草

殖産銀行 守屋 三葉

○青葉の茂り行く儘に物をこそ思へ。實にや定めなきは人の身の土なる哉。東北の一隅に育ちし身の今日朝鮮の都京城に住むと誰か思ひし。次男にしあれば先祖より傳はる家ともなく、この身このまゝ住むところ即ち家也の心はあれど、うら寂しきは故郷忍ぶ折々の夜半なる哉。夢路さへ通はぬ遠さに戀しさは一入まされ。老ひ行く母など悲しとも悲し。

○我庵の庭こそ面白けれ、誰やらが『鹿が欲しい』と言ひけんごとく楓のみあるじ顔なる。冬ざれば枯骨露々一抹の香味なき庭も、春にしなれば若芽は吹けり。夏にしなれば下枝刈る迄青葉は茂りぬ鵲の巢など漸くかくれて繁り立つ木々の合間に南山の紫色にかすむもよし。杏子の二本木の實日毎に黄ばみ一坪の莓は六人の家族に餘れり、朝顔漸くのび松葉ボタン又ところ狭き迄はひこらんとす。朝に起きて其の生氣を愛で夕べに歸りて水をやる、四才の女兒甲斐甲斐しく手傳ふも嬉し。

○鍾路の夜市を見ずや。天幕を張り屋臺を設け、アセチリン瓦斯の香を漂はしつ、何やらん高らかにのゝしりひさくに、白き衣した

る人々此處に彼處に群れ合ひ押し合ひひしめきつゝあざり行くなりワングルを賣るあり陶器を競るあり薄赤き冷水をば分厚きコップに盛りつ一錢にて飲ますもあり、糞垢の特に目立つが汗になりつゝ氷を嚙くもあり。若き夫婦と覺しきが暫く評議の結果大根一把を購ひ互に譲り合ひたる果は男のステッキに貫きつ兩人にて擔げたるあり天晴當世夫婦氣質の龜鑑たるべし

○更け行くまゝにパゴダ公園など此國人の詩境とは化すなり。此方の木蔭彼方のベンチに若人の一人二人惱めるありさゝやけるありハモニカに籠の鳥をしらべ朋々たる曲の音に枯すゝきの哀調を肩せり。品よき古塔の薄暗に聳え立つあたり仰げば星の三ツ二ツむせぶがごとくまたゝくも見ゆ。

○屋外に眠るは心行く業なるべし。石を枕に横はるものアンペラ一枚に仰向けるもの此處の軒端彼方の橋の上御念の入りたるは軌道を枕にいとすややかに眠れり。

○世間は廣し。稍振つたものに便所は一切自宅のものならでは氣の濟まぬ男あり、わざわざ勤め先より立歸りて用を足すなり。汽車を待つは野暮くさしとて必らず發車間際ならではホームに入らぬ變り者あり。下僚が書類など差し出すに直立不動端然として眞正面上り差出さねばお氣に召さぬ男もあり、たとひ心安ければとて急げばとてゆめゆめ横より差出すべからず、威張るとにはあらず型通りせねば氣がすまぬなり。外より來れる便箋など讀み終りたりとてなはざりにせず一々火箸にて隅々引きのぼしつ端然として机の一隅に整理せざれば止まざる厄介者あり、始末して儲けんとにあらず、かくせねば虫が承知せぬ手合也、硯は右に電話は左に机上に一物一として處を得ざれば一々訂正してこれ日も足らぬ苦勞人あり。貧福貧福と一步一步を敷へつ福ならでは家に這入らぬかつき屋もあり。ハテサテ様なる哉。

明朝何時迄は電車は來ぬと見きはめ給へる御了見の程かしこしともかしこし、さはれこの哲人に與へくれたる金殿王種こそあめれ松舘洞社宅の傍新開の道路に沿ひつゝ

積み上げられたるブロッタ是也。近隣相競うてこのうてなに集り淺酌低唱陶然として悦に入るあり或は立ちて舞ふもあり涼風吹いて盡きざるところ歡樂つきて即ち高樓の高きに臥す、星曇漢々千里にっらなりて遙なり、正に王侯のすさびなるべし。

茶を啜りて

平田久雄

勇將の下弱卒なしも、チト古いが原稿の事で行つて、實に氣持よく而も要領を得、十分に理解のあるのは寺尾組の人々、▲追に苦勞人の主人公の奥床しさが偲ばれる。

思ひ出

日之出小學校
第五學年一組

島田秀夫

そまつた、僕はいいて
る下駄をぬぎすて、病
院をさがした。
僕の足には何がさゝ
らうともわからなかつ
た、けだしになつてか
け歩いた。

雜筆記者

初老の宴

茲に至つて『イヤ、今
夜はなかく愉快だ』

それは去年の春休み
であつた。

豊兄さんと、泰兄さ
んと、僕と友だち四人
でけんべい隊に行つた
それは今まさにれんぎ
やうなどが芽を出さん
として居る時であつた

のんびりとしたけん
べい隊の山では、かは
いゝ小鳥がたのしさう
にさえずつて居る、僕
等は景色の美しい中に
うららかな春日をあび
てはね廻つて居た、す
ると泰兄さんはどうし

たハツミかばつたりと
ころんだ、そこは運わ
るくなくめにそき立つ
た切りかぶの上であつ
た。

兄さんはアツと叫ぶ
が早いか、目の上から
はタラン、と血が流れ
出た、怪我した兄さん
は何んだかぐつたりと
なつて起きあがらうと
もしない、僕はハツと
思つて大きい兄さんを
呼んだ、兄さんは今日
に限つて腰には手ぬぐ
ひが用意されてあつた
兄さんけ手ぬぐひで小

さい兄さんの頭をちか
らまかせにきびつた、
けれども血はひつきり
なしに手ぬぐひを通し
てにじみ出る、もう兄
さんの顔はせんけつに

しく祭日であつた――
僕の顔は涙にぬれた。
あのうらめしい太い
切りかぶには、今もど
こかにせんけつのと
が残り居るだらう。

守屋氏失敗記

平田久雄

先々月、大阪支店の開

業式に、頭取と共に上
阪……▲その時、鮮銀
の中西支店長から料亭
つるやによばれる▲頭
取曰く『君、つるやな

ら僕が知つてる』そこ
で、散歩がてら歩く▲
しかし一向つるやは見
つからない▲御兩人そ
ろ／＼心細くなる、そ
こへ一臺のお抱へ車、
いづれは粹者のものら
しい▲これに訊くに限
ると、燕尾姿の三葉氏
三步前へ……そしてぐ
ツと腰を屈め、頭を下
げ『え、一寸伺いま

す、この邊に……』そ
して三たび頭を下げる

▲この奇態な燕尾子を
ぢーッと眺めた車夫公
『課長さん、へ、こ
れはどうしたこと御
座います』課長さんの
一語ビクリとする、そ
こでよく／＼神経をし
づめ、車の定紋を静視
諦観すると、コソ何事

……殖銀大阪新支店の
車、ウーンといつた切
り、二の句がつけない
▲それより先、車の定
紋でソレ知つた頭取、
この奇問奇答を、クス
リ／＼と笑つて居たが

ちよぶや主人堀内さん
が、四十二の前厄とい
ふことになつた▲顔の
ひろい同氏のことであ
る、町内の方々や、丁
子屋の小林さん、古城
さん、佐藤虎次郎さん
などが發起となり、厄
拂ひの會を、花月で開
いて、當の堀内さんを
招待する▲六月五日の
ことである▲來會者百
二十餘名、京城の名流
を一堂に會した觀があ
る▲實に豪勢なもんだ

▲古城さん、發起人を
代表して挨拶を述べ
▲落つき拂つて、論歩
堂々と、實に明快、流
暢にやつてのける▲大
喝采……▲あとで、堀
内さん、謝辭を述べ
言々感激に充ちて居る

▲大盛況裡、十一時お
開きとなる▲古城さん
の挨拶のうちに、堀内
氏が文章の才あること
を言ひ、商人のために
萬丈の氣を吐くことを
言ひ、盛んに京城雜筆
をお引合に出される▲
大漫な廣告……エライ
お提灯を持て貰つた。

花 蛇 に 見 入 つ て

今 村 柄

【 三 五 】

ナニ……其所へ黒装束の奴がヌート現はれて、痙攣を起した様な手付きをみると、猶よいつて。

驚かすな君、僕はコレデも、千兩箱と美人の細君を持つて居るよ

夫れから表坐敷の眺めが中々によい、溪に架つた橋が見へて、向ふに渡信局の官舎が、青葉の裡に

隠し、後ろに二段造林になつた松山のなだれた所は、僻村の小市街と云ふ風趣だ。火の見梯子が一

本矗立して居ると、猶いゝがねー來訪客は、何れも正直でないとい

見へ、イー御住みですネ、眺めがよくて、ト他を言はない。

此所まで書いて一寸一服して考へる所なんだ。

斯ふ云ふ風にダラシなく書くんだよ、文士と云ふものはだ君、よく我慢して聴いて居て呉れたネー

こんなツマラヌ文字を平氣で並べる人間は、余つ程間が抜けて居るが、夫れを眞面目で讀む人は、より以上の……何んだらぶ。

マー魚釣りの人の背後に立つて、風呂敷包を背負つて、ジイット黙つて見て居る人間によぶな、筋合になるネ、物の比較が。

或日僕が其窓にもたれて、思案に耽つた、ト云ふと高尙に聞へるが、實はポカンと仕て居たと思ひ給へ、直ぐ前の庭に薄紫の紫陽花が一トむら咲いて居るのだ。

其花に一匹の蛇が来たんだ、全身が黒くて、頭の邊が少し黄色く相撲取の様に丸々と肥つた逞しい奴だ、或は蜂の種類かも知れんが蛇の方が俳味があるから、マー蛇として置く。

文章と云ふものは、他人の知らぬ所は、ドンナに胡嚙化してもよいもんだよ君、いや實際なんだ。其蛇が花の一つくを訪つて

まあ聞いて呉れ給へ、詩らない話を辛抱して聴くのも、修養の一端になるよ。

冒頭に断つて置くのは、僕は文士では無いが、是れから其文士の眞似をしようと言ふんだ。

何んで文士の眞似をするの？と君達は聞くであらうが、心配するなよ、タダにはならんから、此れから其譚を話す。

僕は文士に對して、好感も悪感も持つて居る。

彼等は敏感で、物の見方が鋭く人生觀に囚けれが無く、兎も角頭が誰よりも御先へ失敬して居る所が好きなんだ。

彼等が意識構成だの、新感覺だの、官能など、具ひ所があるのが嫌ひだ。また彼等の文字が、余りに迂遠冗漫なのが、氣に入らぬ。

ナニ、夫れは何か或物に大に關係があると云ふのか。

僕は其何かに關係が無いが、冗長の方に大に關係があるのだ、原稿を頼まれた時、本氣に頭をひねるのはありや御目出度い人のする事だ、文士流儀に、詰らぬ題材を捉へて、餘の様に引延すに限ると云ふズルサを覺へた。

そこで此れから蛇の事を書くのだが、蛇丈では、其蛇の小便程の分量しか無いから、先づ僕の狼宅から、筆を始める。

、狼宅とは浪人の住居と云ふ

意味だよ、君等は知るまいが、浪人と云ふ名詞は、室町時代に創まり元は狼の字を書いたものだ、老松が參差した南山の溪間に、僕の狼宅がある、夜中には時々仲間のヌクテーの叫びが耳に入る、君相應しくてよいらぶ。

過日永樂町人がヒョクリ訪つて、此邊の名士横町だと、譜を入られた時には、狼宅の權威を損じたと思ふたよ。

何故かと聞く？、君も案外血の廻りの悪い男だネ……、月並の名士に、碌な人間があるかい。

オット、それは誰にも内證にして置いて呉れ給へ。

其浪宅は甚老宅で、温泉を日本風に糊塗したものだ、柱は傾き屋根は緩み、雨漏かする、尤も命には別條なく、坐敷に鹽と傘の準備が入ら無い程度の俳味であるから、まあ安心して居て呉れ給へ。

イクラ俳人でも、住宅は、自由畫より幾何學の方がよいネー。併し又、いゝ事もあるんだ、裏

が一面の松山で黒板塀から見越しになつて、そこへ隣家の丸い大きなスリ硝子の門燈が、半分辨に懸つて松の黒みをボカして居る夜景は、ドー見ても舊劇の舞臺のバック其儘だネー、曹溪寺の鐘がポーンと陰に籠つた時、チュチュ〜と、三昧が這入ると、猶劇氣分が濃厚になる。

花蜜を採つてゐる働き蜂を仔細に

君等もよく停車場や、ホテルに

々に困難だと云ふ譯がハッキリ判

蜂蜜を採つてゐる働き振を仔細に観察すると、リズムの無い羽音を立て、往きつ戻りつ、宙に浮んでは花に出入する、例へば、山伏がラマジナイをして居ると云ふ恰好だね。何んと云ふ努力の徒費であらう。

ラマジナイと迂回の旋動を止めて、ナゼ花を一つづつ、啗押しに片付けて能率を上げぬであらう。と斯ふ言ふに考へて、矢張り人間が毎日冗な事をして居ると、よく似て居ると、ツクツク感心したよ。

併しまてよ、動物の方は人間のよふに虚偽が無いから、何かそこに理由が無くてはならぬと、深く突き進んで考へて見る氣になつたんだ。

判つた。

兎角天才は斯様な平凡な事から宇宙の眞理を發見する。君達には判るまい、網膜に物像が立體に映らないから、どふだ、蛇の目シタルテストは。

話して聞かさふか、それはネ、其元が彼の生存上必要なんだ、つまり動物は總て食物を取る時にも命懸けで眞剣にやつて居るんだぜ君。

蛇があゝやつて居るのは、萬一の敵を防ぐ周到なる用意なんだ、本能かも知れぬが、客觀的には確にそふだ。

動物には別嬪の細君に御給仕をさして、呑氣に飯を食つて居る奴はまあ無いね、基督が言ふた、野に飛べる鳥でも、天の父の恵みは少しも受けて居らぬ。

併し他面から考へると、蛇と同じく人間も、自己保存上必要なる冗を矢張盛にやつて居るネ、一例を言つて見よ。

君等もよく停車場や、ホテルに行くね、あれだ。

畢竟するにだネ、人間の盲腸に蟲様突起と云ふ冗官がある、アレは何十萬年前の草食動物の時の遺物だ、夫れと同じく人間の努力徒費も何千萬年以前の昆虫時代からの傳統的のものだト。

まあそふ極めて置く、僕獨りで君エライ發見だらう。

因襲の殻を脱ぐと云ふ仕事の中

パコタ小宴

雜筆編輯室

石川利夫

本社囑託加藤儉吉書伯が、鮮展の三等に入賞した、それにこれも本社寄稿家の多田毅三氏が、同じく洋畫三等に這入つた、心ばかりであるが、祝つてやりたい、徳野氏、河西氏に相談すると、無論異論のあらう筈がない。この上は、兩書伯にいつも殷切なる好感を有つて居る森さんを引出すに限ると電話する『あゝ、むゝ賛成だな』とある。

そこで、六月三日の晩、パコタ公園勝利に寄る。連中は以上の外兩三名、ほんのうち輪ばかりで、大に話がはづむ。繪のこと、畫壇のこと、詩、創作……すべて青葉の頃のやうな、すがすがしい漫談の頃。御馳走が出る、酒がまはる。でなくても無遠慮な連中、腹がふくれると、どっこいしよ、ごろり横になつて、勝手な熱をあげる。河

々に困難だト云ふ譯がハッキリ判つたんだらう、君。

こゝらで止めようや、ドーだ君文士の眞似がうまく出来上つたよ此原稿が活字になつた頃は、僕は東京でバラック氣分に浸つて居る時なんだよ。

どの方面だと聞くのか。

夫れは銀座でも、神樂坂でも、乃至……ドコでもよい、君等が想像の天地に残して置こう。

西氏と多田氏とハサミ將棋を始め。ハサミ將棋とは情けないとあつて、徳野加藤間に本將棋を始め、盤を引つたくつて、河西對徳野、徳野對加藤……まるで將棋會となる。森さん自ら盤上の人とならぬが、一流の警句盛んに戰士を激勵する。但しそれが概ね現に勝ちつゝある方へ……『どうだな、將棋を見て居ると、妙に強い方へ味方したくなる、不思議に残虐性があるね』……。

とうとう森さんの嚴命で、松本對加藤の大勝負となる。これに時間を要すること、無慮一時間と半おさらばして門を出ると、夜まさに十二時半。

それから二三日目、僕が勘定しに行くとき、おかみボカンとして『まあ、森さんから頂きました』と云います。

スツ裸の魂

南山本願寺にて 安藤 顯 隆

(三六)

風のまにまに動いてゐる。自分の道が判然わからない人はいつも頭ゴツツリして自分で自分のすゝむ可き道がわからぬ。

自分の眞實に生き行く道が本當に解らぬ人間は自ら滅亡を招くものである。

病氣等でも昔から『氣から起る』といつてゐる様に大抵は氣分から起るものである。何所かの書にあつたと思ふが、ドイツの坊さんと醫者とが協力して精神分析學の研究の結果心にかゝる事、氣にかゝる事等、それが基になつて色々の病氣になるのだと發表した。と

に角發表の出來何等かの秘密があつたり、犯罪をかくしてゐるのが最大の原因であるから、その療法として病者に催眠術をかけて過去のことを告白せると全く人格にまで一變すると云ふ事である従て病氣まで治ると云ふ事である。

とに角人間である間は精神的に生きてゐるのであるから、ある一つの事をすればきつと何等かそこに異常を來たすに相違のない事を信ぜしめられる。これを應用していつたら罪惡を犯して飽くまで否

いのです。

看板を飾るから罪が深くなるのだ。

慈善音樂會の幹事をやつてゐる高位高官の奥様が、音樂會を開いてイヤ／＼著物を著飾り、慈善だやら救濟だやら、いうて騒いで居られるが、その癖自分の宅に使うてゐる下女の病氣等は、幾日床に就いて難儀してゐても知らぬ顔の半兵衛をきめこんで、曾て一度も枕許に見舞うてやらないと云ふやうなもの往々ある。看板は他人に向いて外に向いて必要なのだから、對外的には此看板を掲げるが、内に向いては看板はいらぬから内の召使等にはどうでもよいのだと勝手の理屈もつけられ様が、餘程お互に内省す可きであります

虎の威を借りるの風情で、看板のみ大きく見せかけてゐる事は信仰でもなければ、宗教でもない。そうしたものが眞の宗教家であつたり、信仰家であつたりするならば、夫の官爵を借りて何等の内的教養もなく徒らに虚榮心満足のみに入入してゐる奥様も、寺院や教會に住まふものは皆立派な信仰家と云はねばならぬ。

宗教の信仰は一切の看板をおろして、凡夫有るが儘の姿に一步一步忠實に素直に生き行く事に外ならぬ。

博愛主義を叫んでゐるキリスト教が却て誠實味や眞實味を缺いてゐたり、坊さんに血の出る様な眞實さがあまり見あたらないのもやはり單なる看板のみをたかくさしあげてゐるのみで、飲み食ふ人形になつたり、一種の製糞機械の様な連中が多いのに驚かされる。

こうした人に限つて肯定もなく否定もなく徒らに妥協これ事とした灰色で、魂のないオバケの様にフラ／＼して、いつも左に右にと酒の酔ひの發した如く

曾て宮内省のお役人が種馬買ひに外國までわざわざ／＼赴き、種馬を探しあるいてゐる中に一匹の俊馬を見出し、すぐ様多大の金を投じて購つて歸朝してからよく／＼みると種馬にはなくてならぬ學丸を抜いてある事を發見して今更ら乍ら自分の愚に目がさめたとの話があります。

近頃の人々はおまりに表看板にのみさらはれて其人の内的價値を見のがす事が多いのに驚かされます。近來は餘りに看板が多過ぎるやうであります。

と云つて名實相伴ふ看板まで撤回せんけりやならんと云ふのではありませぬ。澤山の人々が色々な立派さうでしかもいかめしい看板をかゝけて居られるから、看板通りにやられますかと聞くと、大抵の人はグキツト行詰るか、赤面するか、其場濁しの胡魔化しをやつてゐて、テント恥ぢな

認しやうとする連中に

に燃え立つて歩みつゝ

佛を拜む眞實の資格が

まれます。南無阿彌陀

認しやうとする連中に對して施し得るやうに精神科學が進歩したらよいと思ふ事が時々あります。

若しか反對に自分の眼が醒めぬと自分の道が解らぬ。そこで人のいふ事ばかり聞いて青ざめたり病氣になる。今日の神經衰弱などは餘程嘘が源をなしてゐる。

と云つて嘘つく事が常習になつて精神の麻痺した奴け手のつけ様もないからドシム法（法）の威力に依らねばなるまい。

青年がマスターベーションの如き秘密の法をやるから自らの因に依りて取りかへしのかの衰弱症にかゝる例も多いのであります。

すべてこつした人はスツカリ胸さらへをしてたら、屹度轉氣して地上生活の光と力とに生きて行ける様にならうこれがない限りは名醫も薬も幾ら飲んでも其効果は少ないであらう根本治療はどうしても、魂それ自らの根本的目醒めでなければならぬ。自分の魂に目醒めた人は右か左か、正か邪か、善か悪か、白か黒かが自然にハッキリして生々した生命

に據え立つて歩みつゝ

こうした人こそ眞に

佛を拜む眞實の資格が
あります。まことの大
佛の六字は此境地を表
地の微笑は茲に始て恵
示したものであります

路上所見

京城商業會議所 大村友之亟

○僕は滅多に本ブラはやらぬが、たまにあの雑踏の中を通ると、向ふから来る人に眼の前でひよいとお辭儀をされて困る事がある。こちらも急いで帽子をとろうとして、中折の積りで頭に手をやると、麥藁帽子の縁が手に觸れる。秋口になると又此反對の滑稽を演ずる。そして十中六七は誰だつたか思ひ出せぬ

○旭町通りの可成深い溝の中に、誰れが捨てたか玉子が一つ轉つて居る。野榮賣の支那人が態々荷を置いて取りに這入つたそれは兩端に小さな穴をあけて中味を吸つた殻であつた。ひよつこり其處に行き合せた僕の顔を、件の支那人が一寸見てニヤリと笑ひ出した。

○アカシヤの並木美しくしき南大門通りの人道で、七つ許りの男の兒が三輪車を乗り廻して居つた。後から十二三にもなるらしい鮮童が一寸悪戯をしたら、その男の兒が振り向きざまに頭をこつんと擲つた。鮮童はそれでもなぐり返さずにぽかんと立つて居つた。

○夕方往十里街道を散歩したら向ふから自動車走つて來た行く手にスタートを切る用意をして、待つて居つた鮮童が、自動車と一所に走り出した。すぐ自動車に負けてやめた。

○京城には、軒下二尺にも足らぬ空地に、木を植へ花を作つて居る家が大分ある。

○本町通を蕎麥屋の出前持が、山と積んだざる箱を片手に載せて自動車を通る、立派な藝術である。と思ふと軌道の上を走る電車に轢かれる人もある。

○支那馬車に、洋装の内地婦人が乗つて居つた。

蓄音器屋Hの話

總督府鐵道局 林 原 憲 貞

【三八】

だが文明の利器を利用して逸早く
駆付けて来た商敵襲来の光景を眺
めて、只事ならぬ場面の突發を思
ふた、果然！利を見るに敏なる商
賣敵の自由競争であつた。

競争は現代社會の通有法則であ
るかの如く、法律や道徳の禁制を
侵してまでも無限に行はれてゐる
世智辛い現世に生れて生活難に悩
む細民ならいさ知らず、細民なら
ざる階級が細民の生活を脅威する
底の競争は縱令自由の權利であつ
ても競争の餘毒といはねばならぬ
科學的に經營方法を改善し、冗費
を省き生産能率を良くし、延ひて
生産品其のものの原價を低廉なら
しめ、一般需要を満足せしむる意
味の實質的競争は、一國の産業増
進の見地から言つても飽迄徹底的
に遂行して欲しいものである。

きつあつたときであつた。

× × ×
H氏は元樂器屋に奉公した経験
もあつて、今單獨に蓄音機を市中
商店の賣價よりも一段低く賣り捌
きつつある、グーズネット式オー
トホン號A型——特價金六十五圓
を、格安四十五圓で賣つて居る、
彼H氏の營業振りは、荷物を驛よ
り受取つて小運搬の仕事を始めと
し、萬般一切自己一人の手で扱つ
て居る、所謂自作農に對する眞の
自作商である、筋肉勞動、經營、
資本の三つを一手で切り廻して朝
から晩まで致々營々として働いて
居る、一面又彼の生活は寔に簡易
質素であるらしく、資産家たらん
とする慾望もなければ抱負もない
只唯食つて行ければ結構だと稱し
て居る。

× × ×
購入原價に割掛すべき諸經費は
寔に貧弱であるから、京城本町目
抜通の店構へ嚴めしい某店の賣價
に比べて、三割の開きのある所以
は諒解に難からざる所である、彼
は四十五圓の値段に相應した消極
的商業經營を爲し其れ相當の生活
に甘んじて居る。

× × ×
折柄自動自轉車に乗つて、威勢
よく駆付けた和服姿の店員が二名
——蓄音機を持參して遣つて来た
のである、僕は先刻來安來節のレ
コードに聞きとれて居たのであつ

固より現代の社會は資本主義經
濟に依つて彩られて居る、是れあ
るが爲め一國の産業が起り、其處
に文化が築き上げられた所以であ
るが、資本萬能の社會相に資本的
餘毒がある、其の暴威に傷つけら
れて種々なる人生の悲惨事が、醸
成される現實の事件を、對勞動者
——所謂勞資關係以外に於て面
當りに觀る。

× × ×
鐵道局の平民的食堂には外來商
人の出入が許されて種々なる商人
や賣人が遣つて來る、和洋雜貨商
人を始め書畫、藥屋、植木屋、茄
子の苗賣まで遣つて來る、二百何
十人を收容して居る食堂の職員を
相手に相當賣れる様である。

× × ×
ポブラの花散り果てた五月下旬
の某日のこと、色の淺黒い顔に『
セルロイド』の眼鏡を懸けた蓬頭
粗服の勞動者らしい態度の若い蓄
音機屋——H氏が來たのである、
食事の眞最中に蓄音機の音か面白
さうに聞え出した、滿堂の人は半
日の疲れたる頭を癒し得る快感を
覺えた、食事中の蓄音機は從來に
無いレコード破りの椿事？であつ
て、多數の人の好奇心と審美感と
を喫つた様である。

× × ×
其の頃の鐵道局の職員は、滿鐵
より拂下げを受けた身元保證金や
共濟金で懐中が暖い爲め、機會が
あらば買はう／＼の購買心理が動

× × ×
後より駆着けて來た某店員は、
H氏の特別賣價より尙七圓を引下
げて三十八圓で賣ると言ひ出した
事の餘りに意外なるに驚異の眼
を光らした買手の一人は『三十八
圓のものを何ぜ君は四十五圓で賣
るのか』と言つてH氏を詰つた、
過激家らしい面相に似合はぬ内氣
な儘しい心情の持主であるH氏は
『私には其の譯は能く判りません
私は如何なる場所、如何なる場合
誰人に對しても飽迄四十五圓で賣
るのです、某店の方が安いと思は
ざるならどうぞ其の方で御買
求めを願ひます、決して私は駆引
や如何はしいことは致しません、
只唯飯が食つて行ければ澤山です
』と言つて恐縮した落付かぬ様子
を見せた。

× × ×
僕は此の問答を聽いて彼の立場
を諒とし、感激の餘り一掬同情の
涙を催したのである。

共済金で懐中が暖い爲め、機會が
あらば買はう／＼の購買心理が動

のである、僕は先刻來安來節のレ
コードに聞きとれて居たのであつ

を諒とし、感激の餘り一抱同情の
涙を催したのである。

日氏と實買濟であつた商約も、
遂に破談の餘儀なきに立ち至つて
了つた、そして彼は悄然として去
つた。

某店は平素六十五圓で賣出して

居る蓄音機を或る競争上の手段
一商權擴張の必要上三十八圓と言
ひ出した譯で、別に不都合呼ばり
をするのではないが、所謂ダンピ
ングとしては餘り大人氣のない遣
方ではあるまいか、可弱い自作

鮮人の二博士

京城醫專教授
醫學博士

綿引朝光

私が朝鮮に着いたばかり
見るもの聴くもの皆な新に
して、興味深く／＼感じつ
ゝあつた時、更らに眞から
悦びを感じましたるは鮮人
にて初めて醫學博士を出し
た事でした。今は朝鮮に二
人の鮮人醫學博士が居りま
す、其の中の一人が結婚式
を擧ぐるに、私は招かれま
して式にも參列し、宴席に
も出席致しました。其の人

の名は尹致衡博士でして、
今は貞洞に立派なる病院を
開いて居ります。丁度それ
は昨年十一月二日でした。
東大門禮拜堂に此の新博士
の結婚式は擧げられました
新婦柳嬢と目出度く千代の
契りを結んだのでした。此
の日式前、式中、式後と何
呉れとなく萬般の世話役は
新郎の親友朴昌薫、鄭民澤
俞日溶の三氏でした。此の

四人は將來誠に有望なる青
年力主家でありまして、間
もなく此の春其内の朴昌薫
君は同じく博士號を授かり
ましたし、他の人々も遠か
らず同じ光榮に浴する方々
です。此の日式場に於ける
私の感想は、極めて直覺的
でした。思へば明治維新の
當時、新進の學者が日本に
芽を出しましたる時、其狀
況は恰も今の朝鮮に於て此
等四人の人々が之れより朝
鮮の文化開發に大なる力と
基礎とを與へると同様だと
思ひまして、そらうに私共
の先師、先人なる維新當時
の青年學者の事を、深く追
想して無量の感慨に打たれ
たことでした。之れより後
愈々文化は向進して多數の
有爲な人物を續々出したき
ものであります。

(一四、六、二二)

商人ヒトリを眼の上の瘤同様厄介
視せねば立ち行かぬであらうか？
勿論三十八圓の賣價は永續性が乏
しい、結局一時的變態的の措置に
過ぎないであらう、併し販賣利益
を捨て購入原價に等しかるべき値
段に迄引下げても、彼某店には資
本的餘力がある、商權獲得に依り
他日此の損耗を優に補填し得るこ
とが想像出来る、僕は事の善悪は
さて擱き、資本的威力の強さを這
の些事に依つて體驗した。

この劇的光景のあつた後、彼れ
は「某店が或る家に六十五圓で賣
つた、其の隣家へ私はいつもの通
りの値段——四十五圓で買しまし
た」とさも皮肉氣に物語つた。

彼は斯様に資本的法網を潜りつ
つ纏に生活を續けて居るのである
が、彼が背後には終始資本的威力
の鋭さが、自動自轉車によつて附
き纏うてゐる、グレンシャムの法則
らしいものが遺憾なく適用されて
彼の生活に脅威と壓迫とが加はり
つゝある。(六月五日稿)

◆世間人間集

平田 久雄

殖銀の森さん、舊交舊知に厚いこ
とは、一寸眞似は出来ない▲記者
は月に二三回は、同氏の應接室に
お邪魔するが、よく田舎の小官吏
風、小公吏風……若しくけ管署署
風の人と一所になる、而かもそれ
らの人が、それ相應の服裝の、細
君や子供を伴ひ、家族的に森さん
と實談をして居る▲一寸、あの應
接室と不釣合の感もあるが、どん
なに對しても平等一様の歡待を
する主人公の風格を考へると、ひ
とりに尊敬の念を生ずる。

泣戻り

仁川桑野仲買店

桑野健治

[60]

いた言葉の手前もある』

「串刺ちやないぞオーさん、一體歸るのかい、それとも泊るのかい」

と焦れつた相に云はば、暫し黙考のオーさん、

「仲居の心盡しに報ゆるの方法は又有らう、奮發して今晚は歸ろう」

とあべこべのことを云ふ。

漸く衆議一決、

「お天氣が變るぜ」

と云ふ言葉に後に聞きながら、俾を驛に走りせる。

ピーツと云ふ汽笛が萬事を解決して、汽車は否應なしに仁川へ、やがて永登浦に着いた頃、

「オヤツ」

と云ふ連れの男の言葉氣付けば外は大雨、

「チエツ歸るのぢやなかつた」と云つたが後の祭。

雨は皮肉に激しくなる。

一同柄に無い事をするものぢやないと云ふ思入れ。

◆論客芥川翁

吉田 莊一

釜日社長の芥川氏といへば、誰れでも論辯縦横の老處士を想像する▲それほど老ひて益々元氣な人である▲處が、實のところ氏の左の肺は遠くに參つてゐる、右の肺も半分以上いけない▲醫師も『これでどうして生きられるかナア』と不思議がつて居る位▲而かも先生なか／＼安臥静養などはせず、盛に客を引いて天下を談するので夫れ人いつもハラ／＼して居る。

河合武雄が京劇にかゝり『簪櫻』と『葛松葉のお葉』を上演して居る時のこと、仁川からの團體見物に割込むでお馴染の不良連二三騒々敷も劇場へと繰込むだ。

そこはソレ不良と札付きの連中丈けに、兎も角行きつけの料亭から係りの仲居が後難を恐れて悪口止めの使ひ物を持込むと云ふ段取『これ〜』と許り額を叩いて悦に入つたもの

さる程に芝居の方は遠慮なく幕敷を軍ねて『簪櫻』も終りを告げた幕合に、食堂へ腰落付けた一人がオーさんの顔と時計を見較べながら、

『時に今晚は終列車で歸るのか』

と聞けば、
『君等は宅を出る時何んと云つて来たんだい』
と逆襲の體。

△
『俺は泊ると云つて来たんだ』
『僕は歸られんかも知れんと云つて来たよ』

『私は出来れば歸ると云つて来たね』
と何れも歸り度くも無さそうな面々ばかり、

『ヘンそんなら泊つたら好いぢ

やないか』

とオーさん頗る冷淡極まる。

△
『それぢやオーさん、君は宅へなんと云つて来たんだい』
と一人が伺ひを立てる、

『僕は今晚歸るとキツパリ云つて來てあるから是非共歸るよ』との給ふ。

△
『そうかい、君が歸るのなら俺等も歸ろうぢやないか』
と異句同音に歸仁に賛意を表すが心残りの有様。

△
『だが明日は日曜で用はなしするのにな今晚終列車で歸るのも考へりや馬鹿／＼敷いネ』
と間を置いてオーさん、未練もありさうに云へば、
『ぢや泊ろう』
と一同意氣込む。

△
『然し今晚歸れば信用回復だね到底歸るまいと思つて居る處へ歸るのだからナア』
で一同亦シヨゲる。

△
『だが思へば仲居が屈けて呉れたビールや辨當の心盡し……此儘歸るのも彼れに對し……』
とオーン亦も本音を吐きかゝる、
『確かにそうだ、ぢや今晚は泊りとするか』
と一同忽ち同意すれば、オーさん『それと出掛けに宅へ云つて置

雜 話

京 劇 に て

平田 久雄

東拓の志村さん、去年の秋左團次
の來た時、二三日ぶつ通しに見物
に行つた▲その時の即興に、

箱根權現覺仇討

寒かろと女房初花いたはればい

ざり車の勝五郎泣く

亦た曰く、

初花よ白糸籠の一念よ箱根權現

その夜雪ふる

それから『河内山宗俊』を見て

宗俊が玄關先の大見得のすてぜ

りふよし左團次はよし

『暮あい』と題して、

暮の間のかるき疲れに仰向けは

ふと見いでたる重役の顔

今ひとつ、

向ふ側樹の中より小手ふりて會

釋をしたるちいさき囃

おもしろいでせう。

書 畫 の 話

吉田 莊 一

鍾路角田洋服店の川端さん、この
前『父と新聞』といふ一篇を書か
れた▲それにもあつたやうに、氏
の家は、長く京都に在住し、同地
の名家としてたつて來ただけ、書
畫骨董品には、ズイ分珍らしいも
のがあると聞く▲それから氏は、
旅行好きで、ズイ分外國を歩きま
わつて居る▲京城の民間で、アレ
ほどの外國通は一寸見つかるとい

靴 の 中 に

石川 利 夫

道評議員の足立丈次郎氏、本誌の
有力な寄稿家だが、何處へ旅行す
るにも、雑筆を靴の中へ……▲道
理で、地方からの注文に『足立さ
んから勧められて』が非常に多い

芝 居 好 き

石川 利 夫

鮮銀の松原さん、俳人としては、
特殊のもち味を有つた、いゝ句を
詠む人として、廣く聞えて居る▲
松原さん、芝居が好きだ、今度も
『河合は見なきやいかん』と、い
そくして居られる▲『僕け山の
奥の産物だからね、芝居は勿論、
小虎丸の浪花節まで聴きに行きさ
但し西洋物と來るとさつぱりだね
世界的樂人とか、伶人とかいつて
もトント難有くないね、畢竟うま
れが田舎者だからネ』。

ゴ ル フ 話

平田 久 雄

總督府の中村外事課長も、六月十
一日いよ／＼外遊の途に就いた▲
中村氏と言へば、ゴルフアとして
は、京城第一流であり、殊によく
研究して居ることに於ては、同僚
を推服させたものだ▲この中村氏
が、ゴルフの本場遊び、みつち
り技を練るに於ては、その進境必
ずや驚く可きものがあらう▲ゴル
フと言へば、一時内地に遊んだ爲
めに、グット力量を落した飯泉氏
この頃グシ／＼盛り返して成續頗
る優良、随つて氣焰も高く、不相
變場中の人氣を、一人で背負つて
立つて居る。

壇 上 の 人

吉田 莊 一

鐵道局阪上さんの字のへたなこと
を書いたから、今度は演説の上手
なことを書く▲阪上さん、早稲田
の出身である▲在校中、演説部の
幹事をして、各校聯合演説會に、
キツト顔を出したものが、天性
の雄辯は、都下學生間に、錚々の
名を成し、早稲田の阪上といへば
恐らく當時の學生で、その名を知
らぬものはない▲この阪上さ
ん、今度鐵道局から、專賣局に轉
任した▲それで、龍山驛長なども
『鐵道は全く惜しい演説家を失ひ
ましたよ』と残念がつて居る。

京 城 富 士

石川 利 夫

守屋さんの二階に、お客様となつ
て見ると、京城市街の一面が、一
眸の裡にあつまつて來る▲但し、
南山が一寸近過ぎる▲ナルほど、
主人公が南山とりのけ論を高唱す
る等と思ふ▲モ一ツ、二階にすわ
つて、裏側の窓から見ると、白玉
山か、四角山かのいただが、一
尺ばかり窓枠の上のつかる、そ
れに霧でもかゝると、富士をつく
りの光景▲つれ／＼草の筆者だけ
に、どこ／＼までも、こまかく、
よく見てとつてあると感心した。

雪の西伯利亞

廣江澤次郎

【三】

「ロスキーと云ふ奴は薄野呂の謀
だが果敢勇斷だ、此ハルビン市街
の買収も思切つて大仕懸けた。

一八九六年 四、五七〇町歩

一九〇〇年 三、四二〇町歩

一九〇三年 五、七一〇町歩

合計 一萬三千七百町歩

此土地の買収を終つた翌年即ち
一九〇四年に日露戦争は勃發した

哈爾濱を第二の莫斯科とし、一五

八七年より一六三八年迄僅々五十

一年間に廣漠たる西伯利亞の天地

を奪取せし凄腕で滿蒙及朝鮮を失

敬仕らんとすの策源地としようとし

たが、大敗して此謀計は挫折した

から東洋民族は眞に幸福であつた

右方遙かハルビン郊外に屹立する

沖積川兩志士の記念碑を望んで私

は云ひ知れぬ感激の涙に袖濡した

露スキーは一般的に餘程血の環

りの悪い國民だ、支那人に洋服著

せた様な人種だ、松花江と云ふ天

然の良河が市街を廻つて流れて居

るに拘らず今日に到る迄哈爾濱に

は上水道、下水道の設備がない、

電車もまだ敷設してない、斯ふ云

ふ近代文化施設を取入れる事には

頗る漫長的だ、此點支那人と相距

る遠からず。朱鎗極彩色の奇麗な

殿堂の様な一面披靡に著たのは薄

暮の頃であつた、東支鐵路の各驛

長さんと車掌さんは皆ロスキーだ

が驛の警備は支那の巡捕や兵隊さ

んが忠實に其任に當つて居る、食

堂車で晚餐を喫し名物のウオーツ

カを少量掘り三等寢臺で淡き旅路

の夢を結んだ。

汽車は容赦なく駛るに似たるも

此東支鐵路東線の長さよ、私は飽

き々々とした、有名なる森林地帯横

斷の事として汽車は峻嶺、險坂、豁

谷、凹地を攀ち上り驅け下り幾た

ひか難線路を廻り廻る、軍政時代

哈爾濱發浦潮行の列車は、毎週
金曜日に急行が一回、普通列車も
月曜日に一回のみで不便此上もな
い、ポクラニチナヤ驛迄は支那領
の事として往來自由だが、露領行に
は絶対に旅行券と喧ましき査照を
要する。然るに哈爾濱勞農總領事
館は、北京のカラハン大使に電照
の上ならでは入露許可出來ぬとか
露西亞人の一流商店の保證を要す
とか、日本總領事館又は朝鮮銀行
の推薦保證状を持参せよとか限り
なき面倒な事を云ふて私を困らせ
る、一癖も二癖もありさうな面構
への赤役人容易に査照して呉れな
い、遂に私は日本總領事館に行き
事情陳辯援助を依頼した、松島さ
んや郡司さんの奔走斡旋で東に角
推薦状を買ふ事が出來た、呉れ々
々も申して置くが、最初に日本領
事館に行つて萬事を相談する事ぢ
や、領事館では親切に何かと世話
して呉れる。

私は鼻高々と日本總領事館の推
薦状を突付けて赤役人に査照を追
つた、然るに赤役人は浦潮政廳哈
爾濱出張所で商談取纏めてから入
露せよと新難題を持懸けた、ギッ
々々肝癪玉が破裂しさうだ、が併
し此頃肝癪玉を破裂させ赤役人の
忌諱に觸れ入露拒絶の憂目を見た
同胞の話は私は聞いて居るの下辛
抱し南市街に馬車を飛ばした、赤
旗懸る高屋の看板と見れば、

「西比利亞遠東國家貿易局東方
分局駐哈帳房」

「國外貿易國民委員事務局遠東
分局代辦處」

二階の廣き部屋……レニンと

トロツキーの肖像が掲げてある、

奇麗な部屋に鋪座まします赤役人

と談判し始めた、赤役人は二割の

保證金を茲に積立て出發せよと主

張する、私は品物も見ず價格も不

明の物にドウして保證金が積める

かと頑強に抗辯し、且つ露西亞の

不用物件を精々有利に賣捌いてや

らうと云ふ私共に言句を附けて入

露阻止とは不心得千萬ならずや、

君等の不心得千萬が窮極赤露に對

し各國誤解を生ずるのであると逆

捻ぢを喰はしてやつた處が、然ら

ば一割に負けよう！五分でも辛抱

すると九切り縁日商人の様な事を

云ひ出した、結局若干日數押問答

の末に無條件入露を承諾せしめ勞

農總領事館で首尾よく査照を取つ

たのは二月十三日……金曜日の午

後であつた、急行列車は午前十一

時に發車済！次の週迄待たねばな

らぬが旅路を急ぐ私は二月十六日

月曜日午後三時廿五分發普通列車

而かも赤切符の寢臺附で浦潮に向

つた。

淹留二十日間の哈爾濱亦思ひ出

多からざるを得ない、傳家甸、埠

頭區、新市街の見へる間私は車窓

に倚懸つて外を眺め瞑想に耽つた

の安泰線か如し？、霏々として雪

館に落着く、其旅路のつらさは

雪の西伯利亞

館に落着く、其旅出の名前は『赤色浦潮斯德』！。

高橋先生

永樂町人

畫面の人物は、いふまでもなく、我高權章之助氏である。これは先日、先生が私の所へ見へ、ちよつと一番と對局して居る所を、極内々で、失敬したものである。どうです似て居ませうか。先生は、實際、將棋好きである。晩年のお樂みは、一に駒いぢりであるやうに見へる。月に二度は、キツト仁寺洞のお宅によばれる。健戰猛闘といつたさし口、仲々するどいものである。感心するのは、少しも負惜みといつた處がない。『どうも香落ではかないませんな、角を引いてもらいますやう』負けてもくまらぬといはぬのが、我天狗道のたて前であるのに、先生この點は、實にキレイなのだ。多年おつき合して、ふかく敬服して居る（畫、笠原ふみを君）。

の安奉線の如し？、霏々として雪降るも其割合に暖かし、露支國境の綏分河、一名ボクラニチナヤ、別名五站へ到着したのは翌十七日午後三時頃であつた、奇麗な驛の食堂で晩刻迄小憩し税關で荷物の検査も終り愈々烏蘇里鐵道に乗る全部三等車ばかりだ、破れたる硝子窓に薄暗きローソクの灯、穢い腰掛！氣味悪き事夥し、氣のせいも車掌君の眼光凄く思はれる、國境守備隊の駐屯するグラデコ驛で旅行券と査照を露官憲嚴密に調ぶ間もなく朝鮮人が百人程乗込んで来た、平北訛りで煽んに論談するヨボシヨ、ネー等の朝鮮語が洵に懐かしく耳朶に響く、京義線定州官川邊を汽車で駛つて居る感じがする、大陸發展の急先鋒！朝鮮民族の偉大さよ！彼等鮮農には赤も白もない、ガイマ々と奥地へ奥地へと進む、私は感心した、併し泥足で二階に昇つたり喧燥を極めたり、お隣で風を捻り潰し始めたには恐縮した、車掌君の好意により西洋人等と共に別の静かな車に移らして貰つた、前日來の疲れでグツスリ寝入つた、朝暾白雪の西比利亞曠原に輝き、陰慘な赤い國も美化され、そのうち静かな瀟灑な曠原中の一驛に停車して居た私を發見した。

大驛小驛に三十分乃至二時間位宛つ停車し、頗る不規律に漫々に浦潮の品川驛とも云ふべき一番河驛に雲頭著いた、西洋人も茲で降りた、停車一時間に及ぶも發車せず遂に私も茲で降り馬車を飛ばして旅館に行く、途上數人の劍著鐵砲で護衛された罪人——後ら手に細引で締上げられたロスキイと支那人——と行違ふ、私は思はずゾーツとした、キタイスキ街の旅



金剛山國立公園論

總督府鐵道局 久保田得三

〔BB〕
れた湯部の温泉は、今夏だけで約八千名の外人遊客を迎へて居る。長崎縣の投じた二十餘萬圓の資金は今幾倍かになつて長崎縣否日本に落ちて來つゝある。

○ 東洋に遊ぶ外客にして、支那方面から來るものに、朝鮮の宮殿や金石の藝術で特に興味を惹かしむる事は困難である。又内地方面から來たるものに、美しい庭園や木造古建築で特に朝鮮でインテレストを感じしむる譯にはいかない、

斯く趣味に於て奮弱の朝鮮に、世界的に誇るに足る唯一の偉大なるものは金剛山である。此意味に於て金剛山は朝鮮の至寶であつて又日本の一大名所である。之を完全に保存し現代的に設備を施すは朝鮮の當然に有する義務でなければならぬ。此管理經營の方法が私の金剛山國有論の出處である。

○ 私に過去十數年間必ず年に二回は金剛山に登つて居る、そして其都度山溪の遊覽施設に多少の變化を目撃して居る。然し其變化と云ふ意味は、必しもそれが非歩善化の意で無く中には随分變にさばる程の無智と悪化の蹟を見た。具體的に其等を茲に指點するは紙面の制限で許されぬ。

For the Benefit and Enjoyment of the people.
是れは故ルーゾベルト大統領が米國々立公園コローストンの北ロギーチナーの石門に掲げしめたる名の碑文である。最も簡單明瞭に國立公園設立趣旨を云ひ表はして

居る許りでなく、如何にも平仄的に感じよく經營者の注意と遊覽者の自重を促す言が言外に溢れて居る。私は此碑文を借用して、あの放任的でなければ無定見の金剛山管理者と、没趣味にして節制の無い探勝者に、捧げたい。

○ 遠い米國の話を多く語るを要しない。最近日本に於ても國立公園問題が擡頭し天然の風趣保存が稱へられて居る。國立公園とは文字の示す如く國家が天然を管理し公園經營を爲すものである。其處は天然の寵好を最も多く享けた雄麗の勝景であるべきは勿論で、小さな地方的利權問題や一交通業の營利を目的として經營されるべきものではない。又國立公園編入申請が運動効果を奏さねば其途に漏れる程價値の乏しい處を騒ぎ立るも間違つて居るが、萬人均しく賞揚する景勝を開却するのも間違つて居る

○ 日本の國立公園は未だ具體化して居ない。只だ比較的組織的に官營せらるゝものに、東北の松島と九州の温泉と二つの縣營公園がある。その内でも温泉は長崎縣が過去十年の日子と二十餘萬圓の費用を投じただけあつて公園施設が完整しかけて居る。十數年前出稼ぎ戻りの天草美人の療養地として、僅かに九州中部の一角にのみ知ら

猫の額程の川端や山の裾や又海の岸に、○公園計畫と云ふを到る處にもつ朝鮮の官民が、どうして金剛山國立公園計畫と一體でも喚ばないのだらう。其等の人達は金剛山が國立公園として價値のないものと信じて居るのだらうか。或人は言ふ、朝鮮に數多の公園計畫あるも未だ完全に具體化せるものは殆どない、獨り金剛山の分却却されて居る譯けでない。成る程箱庭の様な公園さへ完成出來ぬ官民に、東西三里南北數里に亘る地域の金剛山公園計畫を強ゆるは無理かも知れぬ。然し私は敢てお答する、箱庭の公園計畫と金剛山國立公園計畫とを同様同格に取扱ふは大變の間違ひである、屋臺見世の開業と大百貨店の開業を同一の頭で考へると同様の類で。

○ 茲に私の金剛山國立公園案の大要を披露して置く必要がある。先づ其組織から云ふと、金剛山公園は法律により朝鮮總督に直屬せしめ其下に公園監督官を任命し、此れに公園經營に關し絶大の權限を附與し、地方官吏や自治體の踞踏的見界の容喙を絶対に許さない事にするのだ。そして其絶大の權限と云ふのは、第一に營利業者の公園域内に侵入する事に依り天然の俗化されるを防ぎ、營利業者の營業狀態及賣品値段を監督する事だこの營利業者の中にはホテル温泉旅館、休憩茶屋、自動車、人力車輿、遊覽船業者、物品販賣業者及

案内者運搬夫等を含み、彼等の濫設暴利不親切を取締るは言ふ迄もない。次で遊覽者に依り自然物及禽獸類の毀損されるを防ぐ事、道路橋梁の造營修理、遊覽の勸誘宣傳並に山内諸現象に對し學術的研究の結果を通俗的に遊覽客に知悉せしむる事等一切である。

○ 叙上に依り金剛山國立公園設置の目的が大體分明するだらう。即ち一地方の繁榮策として將た又我等の遊覽を目的として計劃する公

園より一層廣い世界的公園の出現を望むのが此案である。されば其設備は日本人本位、日本人専門の施設に傾いてはならない、内外人一般に適應する準備を必要とする。そして國際的遊覽旅客の誘引に努め、以て朝鮮を紹介し日本を宣傳し、延ひては國富の増進に資せんとするが最後の目的である。之は必しも無謀の企圖でない、つひ目の先きに在る、長崎縣の温泉が我等に恰好の例を示し呉れて居る。

お答へ

朝鮮火災海上

河内山樂三

筆者は本誌の五月號に於て、青葉橋と題し秃筆を呈してくだらぬ文句をならべた、尤も末尾に『青葉橋には敬意を表す』と斷つて置いたものであるが、まだ橋神の怒が解けなかつたのであらう、程經て左のやうな葉書が舞込んだ、ところが匿名なので返事の仕様もない、已むを得ず貴重な餘白を借りて簡單にお答する。

京城雜筆『青葉橋』拜誦、御尤の次第と存じます、然るに貴名『河内山』は『カウチャマ』か『カウチャマ』か『カワウチャマ』か、これも假名を振らなくては讀まふやうです、私は芝居の宗俊から判斷して『カウチャマ』と讀んで、ます、夫から若

し『カウチザン』なら角力取、ラクサンと讀めば落語家か浪花節語り、イヤなんだか愈々分りにくくなつた。

匿名とは申し乍ら随分きつい御詰問、仰の通り筆者の姓は厄介であります、中學の國語の先生から『河内』は『カハウチ』から『カフチ』となり『カウチ』となつたのだとの講釋を聞いた事もありますが、今の發音では『カウ』でなく『カウ』でありますから、捧引假字で『コー』とすれば最も適當なやうであります、處が捧引假字は國定教科書からも省かれたとか云ひますから已を得ませぬ、従つて『カウ』と振假字してもカウかコーか尙徹底しませぬからよし

ました、尤も私自身には『カウチ』でも『カウチ』でも『コーチ』でも皆よく通用致します、何れで御呼掛け下さつても直ちに御返事致します、又名の方も『ラクザウ』と樂に御讀み下さればよいものを、時には『ガクザウ』と讀んだり、又は御丁寧にも『樂山』とアテ名した郵便物が時々到來致します、恐らくは姓の『山』と名の『三』との觀念の連鎖に基くのでありませう、それにしても、芝居の宗俊や角力取、落語家、浪花節語り、いかにこれ等と同類らしい、仰言には少々恐縮致しました勿論只今のところ別段心當りもありませんが、ゆる／＼とよく調べたら種擔ぎや、鹿の足や、將た亦浪界の名士とやら申すものの内には、親類縁者があるかも知れませぬ、しかし宗俊坊とは全く以て赤の他人であります、彼れは、今は昔花のお江戸をあらした愚黨坊主であります、筆者は關西の避障に育つた田舎者で、小心翼々至つて正直者であります。別段懐中物御用心にも及びませぬ、終に蒞み『カウチザン』とだけで『バルチザン』と語呂が合ふなど、仰せ下されざりし事を感謝致します。

◆南圃採菊録

石川 利 夫

青木專賣局長、得意の時も、失意の時も、ちつとも態度が變らない▲得喪利害の外、別にふかく天を信ずるからであらう▲腹が出来てると思ふ▲當節では、果樹、花卉の手入れを樂み、それも骨董的でなく、所謂學術的に、ふかく究めつゝあるやうだ▲朝鮮の官界にはあんな風格は一寸求め難いと思ふ

雑想

永樂町人

愛慾充足機關を思ふことになる。即ち白拍子、うかれ女、傀儡子が起つて来た。

○ 歸るところ男子は、女子を占有したい慾がある。けれども、それが貞女の固定をすれば、何の楽しみもなくなる。そこで亦た、自然兒的女性を求めることになる。

○ おほ昔のやうに、母主的家族制度は、再び樹てるところとは困難かも知れない。けれど、女子の奮發一つでは、もう少し男子を驅使することが出来やう。

○ すくなくも、異性選擇權を、今一度その手に回復しなければウツだ。

○ 近ごろ、女子解放とか、婦人參政權とかいふが、形式はどうでもいふ。

○ 女が女のもち前にさへ還元したら、鳩や、孔雀のやうに、男子をその前に屈服させること、まことに自由でないか。

○ 先がうつくしくなれ、そしてつと魅惑力をもつやうになれ。

○ 投票用紙の分配などは、どうでもよからうでないか

○ 日本でも、ズット昔は、女が仲々活潑であつた。

○ じつと、男に選ばれて、それに屈従しないのみか、自ら進んで、異性選擇權を縦横にふるつたのである。

○ 萬葉を御覽なさい。彼の男は、いけ好かないこの男は、容子がいゝなどいふ歌がいくらでもある。

○ これを、淫蕩といふのは嘗つて居ない。女は、はらむものである。子孫を作り、後繼種族をふやして行くものである。

○ だから、自然が彼女に、よき相手、よきた、ね男を見つけさせるやう、豫めそなへたのである。

○ 天意の深遠を、思ふべきである。

○ 然るに、その後支那の歴史が這入り、武家政治が引

つづいて行はれ、女はずつかり物品同様に、思はるゝに至つた。

○ 娘は、父の所有物件、妻はおつとの所有物體……自由を考へ、選び、はらむことは、全く出来なくなつた

○ そのころの女性は、鳩や孔雀よりも、あはれであつた。

○ そして何よりも、よき見よき後繼者をつくる機会を、うばはれ、その存在は生物學的に、きはめて消極的な存在であつた。

○ 然らば、これで男子は、たんのうしたか、満足したかといふと、却つて最も弱つたのが男子だから面白いといふのは、女子が物品化する、その當然のち味……即ち戀愛的魅力を失つてしまふ。性的靈惑……快感が薄められる。そこでうちの貞女ではたんのうしないことになり、別に他の

編輯後記

雜筆同人

◎綠陰を思ふ時候となりました窓下俳書をひもどくには、いちばんいゝ時でせう。

◎それから亦、本ブラ季節ともなりました。何ほどの金をぶ

ところにし、散歩がてら古本屋をひやかすのも、最もふさわしい時

◎社友のなかには、金剛や、元山の港——或は故郷の海、山へ出ぶかれる方が、これからそろそろあらうと思ひます。雜誌製造人に避暑、避寒はない、それはもうあきらめて居ますが、そんないゝ處へ、心氣轉換に行かれる方は、その罰俵に、何か一篇はキツト書くことにお願ひしたい。

◎京城の宴會——そのひつきりなしの宴會が、どれほど或る階級

をわづらわして居ることか。それが爲めに、この雜誌の原稿などもズイ分あてはづれになる。のろふべき長夜の宴と思つて居る。

◎社友の或方などは、金曜の夜を、両親、知友、またはこの雜誌への、原稿を書く晩ときめ、一切の他事をしりぞけて居られる。『原稿の晩』はおもしろい。こんな憲法でもつくらぬと、逆も今の京城では、清閑の折はありますまい

◎今度も、しめ切り後、五六篇到著、惜しいと思ひますが、次號へ……どうしてもタシカナところ十日までに、御投函下さいませうに。

次號原稿

七月十日締切り
しかし一日でも早く
お送りのほど切望い
たします。

雜筆編輯同人

あそ葉

朝鮮銀行 岸 巖

山も都も今宵青葉の雨ふる
この町青葉して夕べ夕べの遊び兒
ざるそば喰ふまで青葉の窓をあける
青葉の窓に小夜著を縫うてる
青葉の門の灯のみでひっそり閉ぢてる

社告

加藤松林（日本畫）
笠原文夫（漫畫）
加藤君は鮮展の花形であり、笠原君はどなたでも約三十分で漫畫中の人物とします、お望みの方は小社へお知らせ下さい、すぐ御紹介申上げます

京城雜筆社

金銀白金

地金ノ御用ハ
京城明石町
徳力本店出張所
電本二〇八八
電本一五七二

細工の
御用は
本町
徳力ハ
電本三九三九

電本三九三九

大正十四年六月三十日印刷
大正十四年七月一日發行
一部定價金四十五錢
京城府和泉町一六四
發行兼 松本 武正
編輯人 石川 利夫
印刷所 京城日報社
京城府和泉町一六四
發行所 京城雜筆社
電話光化門三〇六番

官製食卓鹽

朝鮮總督府專賣局製造の本品は理想的經濟的の調味料で文化生活に缺ぐべからざるものであります
 徳用大瓶小型振出瓶等數種の美しい瓶入で價格低廉です是非御使用願ひます

京城府南大門通二丁目九七九八

發賣元 富田商會

長電話本局三三〇九番
 振替京城四五六八番

夏向背廣服
 同オーバ
 レインコート
 新地質續々着荷

仕立念入り價格は安い

經濟的理想の既製品頗る豊富

▲御注文に應じ特製仕候

京城 鍾路一ノ一九

角田洋服店

電話光化門九五五番
 振替京城一八四三番

二第
標商錄登

류디

美麗堅牢

大陸
고구

大陸ゴム工業株式會社
總販賣部 南大門支店

京城南大門通五丁目(南大門側)

電話光化門長七六五番
振替京城七二三三番

大陸ゴム工業株式會社總販賣部

京城府鐘路二丁目(裁判所前)

社長 李夏榮
專務 岩間亮

電話龍山長三四番
振替京城一〇二八一番

京城府元町二丁目
大陸ゴム工業株式會社

一第
標商錄登



我
고구
鮮靴元祖

撰べ讀め

誌雜の界業實

秋春界財

京城府若草町九九
財界春秋朝鮮支局
電本三九二二番

獨乙高級ピアノ

山葉

ピアノ

山葉

オルガン



カタロク贈呈

各種蓄音器



直輸入商

釘本洋樂器店

京城本町

電話本局二二八三番
振替京城六八四番

京城府明治町通り

富屋洋品店

電話本局二六九番

京城府本町通り

富屋支店

ワイシャツ
カラ
洋製附屬品

標

時計や

指輪の

御注文は

是非とも

村木へ

時

京 城

村木時計店

正確なる
タイムの
主持

電話本局四七一

準

計

京城府長谷川町八十四番地

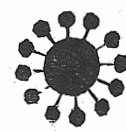
古河電氣工業株式會社

京城出張所



鈴木木商店

京 城 支 店



早川 李英 敬 啓

事務所

京本喜多門通
朝鮮銀行前

工場

豊金町四丁目
電 二四七六番

眞にこれ我れが蓄音器に新紀元を劃する優秀器

蓄音器月賦販賣開始

金三十五圓御拂込と

同時に現品差上ます

第二回ヨリ金六圓宛向五ヶ月

一、高音にして又如何に低
聲微妙な音色でも原音そのま
まに聞かれます

一、瑞西製一時二挺モーター入

一、演奏力兩面盤五面

一、發音管最新グーズネツク巻上

一、品質永久絶對保證

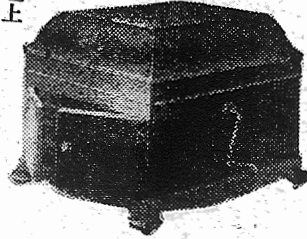
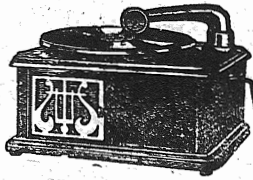
乙號金十八圓

御拂込と同時に現品差上ます

第二回ヨリ金四圓宛向四ヶ月

◎音聲強大、使用に便利で輕
るくて當ばらず室内用旅行用
最適品

最適品



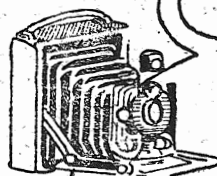
オートン

京城本町壹丁目
外國貿易元
直輸入

セヤマ楽器店

電話本局一四七九番振替京城一〇七五六番

寫真機



時計
金銀銅錫器



寶石
金銀

大 華 商 會 京 城 友 店

北京城內一丁目
電話本局二六三九四號
振華京城三一號

寫真材料
幻燈機
映寫機

向上靴

紳士向
學生向
女學生向
各種

向上靴は彼の有名な教化事業向上會館産業部の製品
で御座います、事業の性質から『正しき製作』と
『正しき材料』とに依つて作られ、之に『正しき價
格』を付して賣られて居ります、何卒御試用の上御
批判を給はり度存じます

京城南大門通り

向上靴
一手販賣店
子屋洋服店

電話本局
長二四六
二二九九
三〇九〇番

休日なし毎日夜九時迄營業——御用の節は店內クツ部御呼出被下度候

◎銘仙と

毛糸◎



京城本町

あづまや

堀内満輔

電話本局
八五五
九〇〇
〇六五
番番番

◎多少に拘らず御用命

の程を願ひ上げます

熊平商店 株式會社


宗正ラクサ

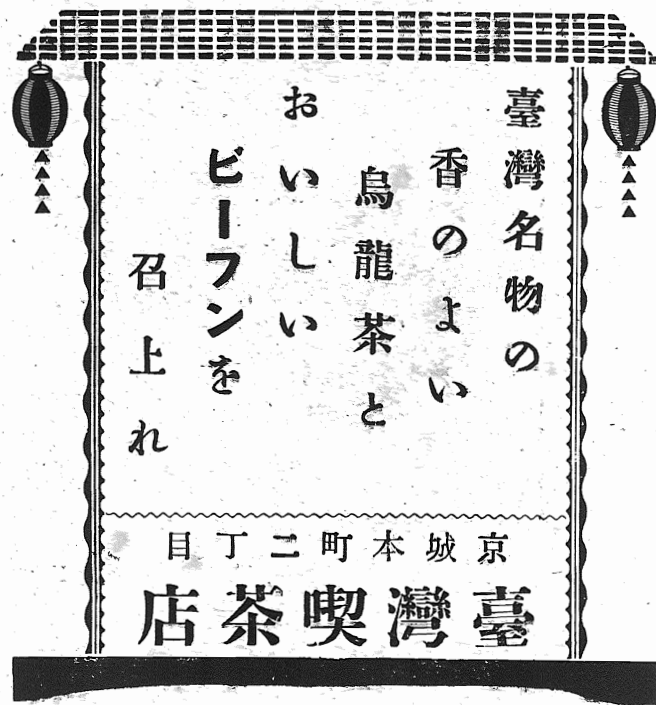


〇春風にサクラ正宗の軽き酔

元 賣 販 手 一
 堂 生 貴
 目 丁 二 町 本 城 京
 番 八 六 七 城 京 替 振 • 番 八 三 一 局 本 話 電

浴 用
 精 萃
 府 督 總 鮮 朝
 製 司 賣 專





臺灣名物の
香のよい
烏龍茶と
おいしい
ビーフンを
召上れ

京 城 本 町 二 丁 目
臺 灣 喫 茶 店

金子剛山の産松の實應用菓子

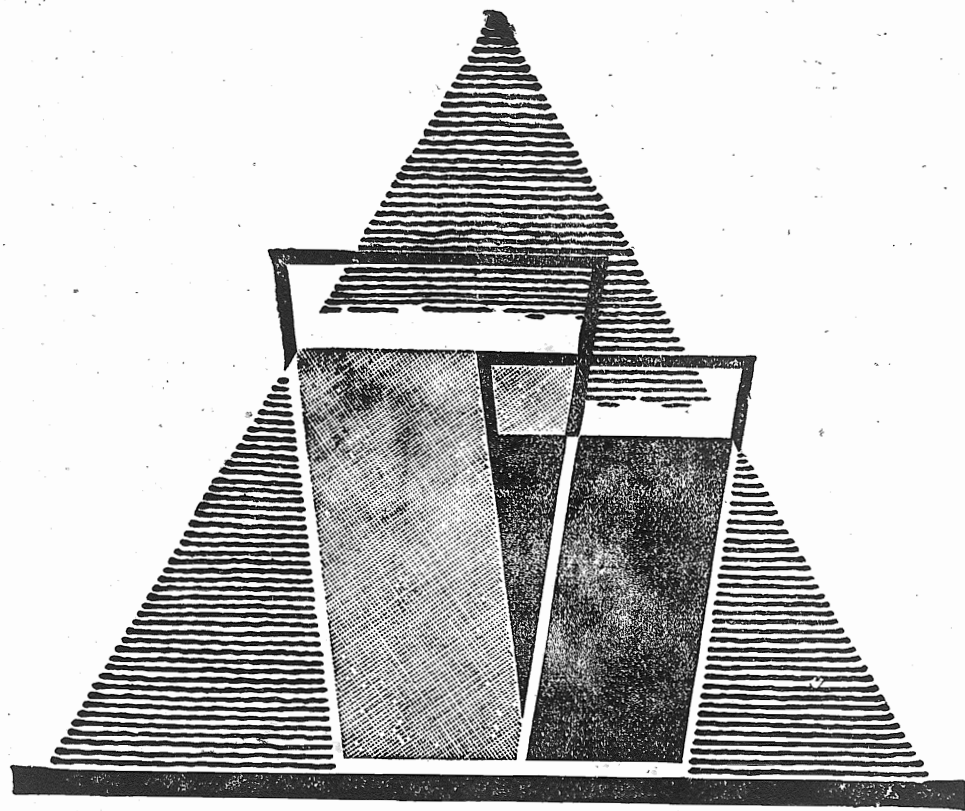
金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金
剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛
ほ	で	この	う	柏子菓	お	羊	煎	饅	山	飴
し	ん	の	に	朝の實菓子	こ	羹	餅	頭		
	ぶ	あ			し					
		た			こ					

電話本局
(二七四)番
(七五)番

龜屋商店

京二城本町

キリンビール



賣發屋治明會社株式

キリンビール

京城雜筆 (第七十七號)

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
大正十四年七月一日發行(每月一回)發行

害 虫 浮 塵 子 驅 除 油

健 稻 油

京 城 府 明 治 一 町 一 五 六

浮 塵 子 驅 除 油 研 究 所

電 話 本 局 三 八 八 番
振 替 京 城 八 三 三 番